

浅川扇状地遺跡群

桐原牧野遺跡(4)

——(仮称)桐原二丁目マンション新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

2024年3月

長野市教育委員会



調査地から浅川扇状地扇頂および地附山古墳群方面遠望（中央路線：高田若槻線）



「文政八年桐原村絵図面」（写真図版目次）の西沢堰、鐘鑄堰が交差する付近の調査区

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第 174 集として刊行いたします本書は、(仮称)桐原二丁目マンション新築工事に伴って実施した浅川扇状地遺跡群・桐原牧野遺跡に関する発掘調査報告書であります。

発掘調査は、桐原地区の皆様のご理解とご協力を得て実施され、古墳時代前期の周溝墓および古墳時代中期の竪穴建物跡、古墳時代後期の掘立柱建物跡など古墳時代の集落や墓域が検出され、桐原周辺地域における当該期の集落のありかたや墓域を考察するうえで重要な資料が得られております。この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和 6 年 3 月




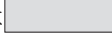

長野市教育委員会
教育長 丸山 陽一

例 言

- 1 本書は、「(仮称)桐原二丁目マンション新築工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター担当）が実施した。
- 3 調査地は、長野県長野市桐原二丁目883-1外に所在する。調査面積は299㎡である。
- 4 発掘調査は、令和5年3月2日から令和5年3月29日にかけて実施した。起因本体工事の外構工事である浸透柵施工工事に関わる工事立ち会いは、令和5年10月19日に実施した。また、整理調査及び報告書刊行にいたる業務は令和5年度に行った。
- 5 発掘調査ならびに報告書作成にあたり、長野都市計画道路高田若槻線に関わる埋蔵文化財の発掘調査および報告書作成を担当された長野県埋蔵文化財センター調査第一課長 西 香子氏よりご支援、ご教授を得た。記して感謝申し上げる。
- 6 本書の編集・執筆は青木一男が担当し、第4章第1節はパリノ・サーヴェイ株式会社に、第4章第2節1は坂城町教育委員会 篠井ちひろ氏より玉稿を賜った。記して感謝申し上げる。
- 7 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで保管している。なお、本調査の略記号は、「AKMY」である。

凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

- 1 本書では、検出された遺構のうちで時期・性格等が明らかなものを中心に報告した。
- 2 遺構図の方位は座標北を表している。
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138° 30' 00"、北緯36° 00' 00"）の座標値（日本測地系2011）と、日本水準原点の標高を基準とした。
- 4 遺構名は、種別ごとに下記の略記号を用いて通し番号を付した。
竪穴建物跡…S B、掘立柱建物跡…S T、周溝墓…S D Z、小穴…S P、河川跡…S D
- 5 遺構実測図は、縮尺1/20で作成した原図をもとに、縮尺1/80で掲載した。微細図その他についてはその限りではない。
- 6 遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに、土器1/4、土器拓本1/3、石器・石材1/4の縮尺で掲載した。
- 7 遺物写真の縮尺は任意である。
- 8 遺構実測図において、被熱面は、灰分布範囲はとした。
土器実測図において、赤色塗彩は、黒色処理は、剝離はを表す。
- 9 土層の色調記載は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。

目次

巻頭図版	
序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査体制と調査日誌抄	2
第2章 遺跡環境と周辺調査	4
第1節 浅川扇状地遺跡群の考古学的環境	4
第2節 桐原牧野遺跡周辺の弥生時代後期～古墳時代中期の調査	6
第3章 調査成果	9
第1節 調査概要	9
第2節 遺構	12
第3節 遺物	25
第4節 浸透柵施工工事に関わる工事立ち会い調査	41
第4章 分析・まとめ	42
第1節 第2号竪穴建物跡・床直炭化材の樹脂同定・放射性炭素年代測定結果	42
第2節 まとめ	45
報告書抄録	
奥付	

挿図目次

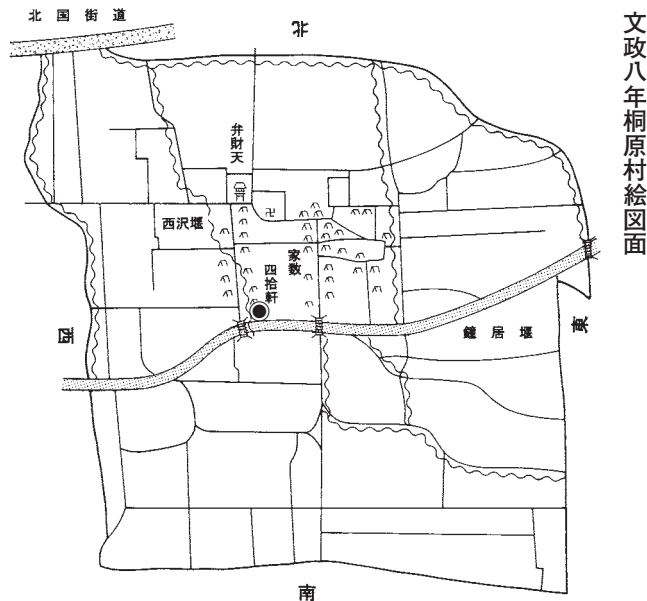
図1 調査地位置図	図13 第3土器集積・土器、石材出土状況実測図
図2 浅川扇状地遺跡群の遺跡位置図	図14 河川跡・SD1土層断面実測図
図3 桐原牧野遺跡周辺の調査成果(弥生後期～古墳中期)	図15 土器実測図 1 (SB1-①)
図4 調査区東壁土層断面図(基本層序)	図16 土器実測図 2 (SB1-②)
図5 調査地全測図	図17 土器実測図 3 (SB1-③、SB2-①)
図6 第1号竪穴建物跡・SB1実測図	図18 土器実測図 4 (SB2-②、SB3-①)
図7 第2号竪穴建物跡・SB2実測図	図19 土器実測図 5 (SB3-②、ST1、SM3004、検出面)
図8 SB2カマド内土器出土状況実測図	図20 土器実測図 6 (第1土器集積、第2土器集積)
図9 第3号竪穴建物跡・SB3実測図	図21 土器実測図 7 (第3土器集積、第4土器集積、小穴、河川跡、検出面)、石製品実測図①
図10 第1号掘立柱建物跡・ST1実測図	図22 浸透柵調査区①、②
図11 周溝墓3004・SM3004実測図	図23 周溝墓SM3004の復元
図12 第1号周溝墓・SDZ1、SDZ1内土器集積実測図	

表目次

表1 ST1出土土器観察表…………… 17 表2 遺物観察表…………… 36

写真図版目次

写真1	発掘調査直前の降雪の現地	写真16	掘り方・P3
写真2	重機による表土除去作業	写真17	掘り方・P4
写真3	遺構検出作業（SM3004周溝検出の様子）	写真18	ST1、SB1、SDZ1
写真4	ドローンによる空中撮影	写真19	周溝墓3004・SM3004
写真5	調査に従事した発掘作業員	写真20	周溝西壁
写真6	調査区東壁土層(基本層序)	写真21	周溝北壁
写真7	調査地点から北長野貨物駅遺跡遠望	写真22	第1号周溝墓・SDZ1
写真8	調査地点の古墳時代周溝墓と竪穴建物跡	写真23	第1土器集積・高杯（130）出土状況
写真9	第1号竪穴建物跡・SB1	写真24	第3土器集積・土器および石材出土状況
写真10	カマド内支脚高杯出土状況	写真25	SDZ1、ST1、土器集積1～3
写真11	P1、土器17、51出土状況	写真26	古墳時代中期土器
写真12	第2号竪穴建物跡・SB2、SM3004	写真27	古墳時代中期・後期土器
写真13	カマド内土器出土状況	写真28	浸透柵①調査区
写真14	第3号竪穴建物跡・SB3	写真29	浸透柵②調査区
写真15	第1号掘立柱建物跡・ST1		



2019年『桐原区誌』桐原区誌編纂委員会
図面よりトレース ●調査地

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

調査地が所在する吉田桐原地区は、長野市の北東部に位置する閑静な住宅街である。当該地におけるマンション建設計画の覚知は、令和4年12月9日付けで事業者（個人）から提出された文化財保護法第93条の規定に基づく届出書であった。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「浅川扇状地遺跡群」の範囲内であり、長野県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）が実施した高田若槻線調査区の隣接地でもあることから、埋蔵文化財の良好な包蔵が確実にされる場所であるため、同月22日付で「発掘調査」の保護措置を長野市教育委員会（以下、長野市教委）から指示した。

開発事業の主体者である委託者におかれては埋蔵文化財保護の必要性をご理解くださり、記録保存を前提とした保護措置について協議を継続した結果、開発予定区域の829.54㎡全域を保護対象範囲とし、うち埋蔵文化財への影響が排除できない215㎡以上について記録保存を目的とした発掘調査を行うことになった。これにより、令和5年1月27日付で事業主体者からの発掘調査依頼書の提出を受け、同年2月7日付で締結した「埋蔵文化財の保護に関する協定書」に基づき、同日付で令和4年度分の「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。なお、調査の実施に伴い必要となる掘削用の重機や作業員休憩用のコンテナハウスなどについては、委託者から現物提供されている。

現地での発掘作業は、令和5年3月2日から3月29日までの28日間行った。その後、令和5年3月に委託契約の変更を行った後、同年3月30日付で「発掘調査委託業務実績報告書」と「収支精算書」を事業主体者あてに提出し、令和4年度分の業務を終了した。起因本体工事の外構工事である浸透柵施工工事の立ち合い調査は、令和5年10月19日に実施した。令和5年度に整理調査を行い、本書を刊行するに至った。

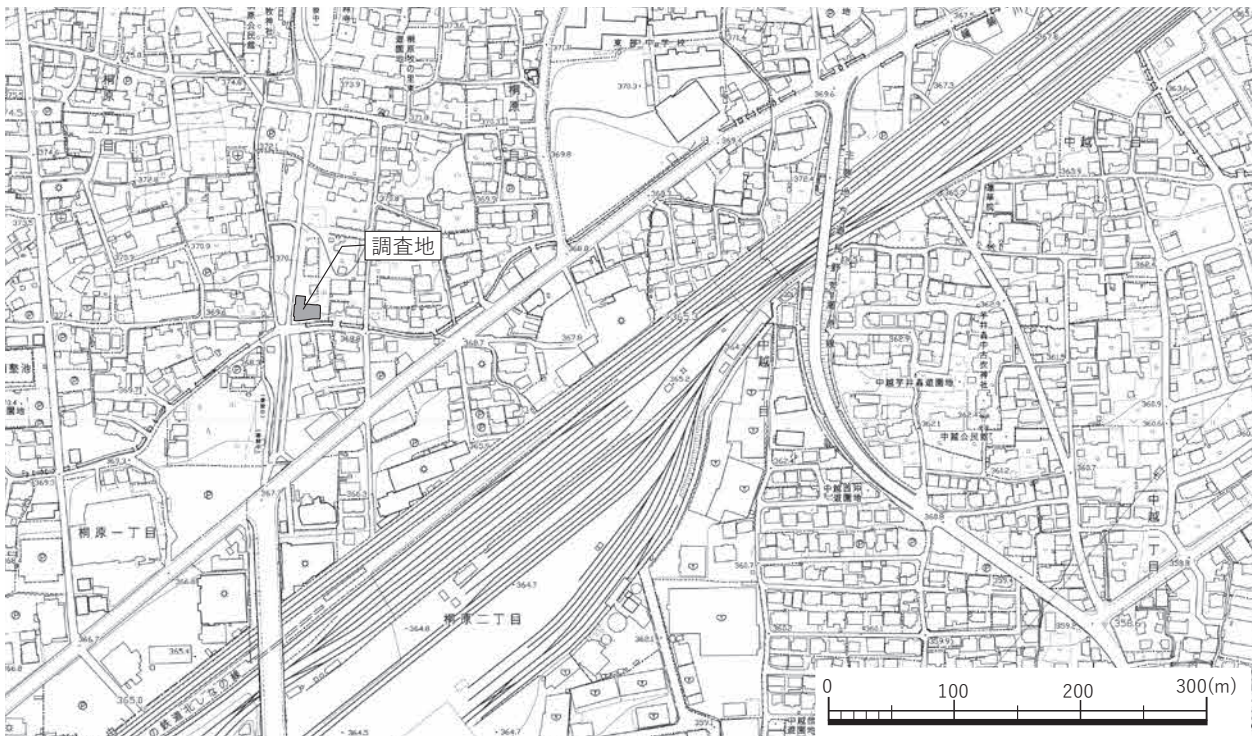


図1 調査地位置図（1：6,000）

第2節 調査体制と調査日誌抄

1 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが実施した。組織は以下の通りである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	丸山 陽一
総括責任者		教育次長	藤澤 勝彦
総括担当者	同	文化財課 課長	前島 卓 (令和4年度) 石坂 陽子 (令和5年度)
調査責任者	同	埋蔵文化財センター	主幹兼所長兼大室古墳館長 大井 久幸 (令和4年度) 飯島 哲也 (令和5年度)
調査担当者	同	文化財課 (埋蔵文化財センター担当)	課長補佐 飯島 哲也 (令和4年度) 〃 風間 栄一
庶務担当者	同	埋蔵文化財センター	所長補佐 伊藤 慶順 (令和5年度)
調査機関	長野市埋蔵文化財センター		
	庶務担当	主事	小林 和子 (令和5年度)
	同	事務職員	宮本 博夫、平林満美子
	調査担当	主事 (学芸員)	小林 和子 (令和5年度)、鹿田 奨之
	同	研究員	青木 一男 (主任調査員)、田中 暁穂 (調査員)、 千野 浩、清水 竜太、井出 靖夫、 鈴木 時夫 (令和4年度)、山岸 龍二 (令和5年度)、 越志 風沙 (令和5年度)
発掘調査員	向山純子		
発掘補助員	後藤大地、芹沢 璃音 (令和4年度)		
発掘作業員	青山三枝子、植木 義則、上原 律江、江守久仁子、大谷 盛孝、岡沢 貴子、金井 節、 杉本 千代、月岡 純一、中村 泰明、早川 美加、宮尾 弘子、向山 久、渡辺 由美		
整理調査員	青木 善子、市川ちず子、鳥羽 徳子、半田 純子		
整理作業員	飯島 早苗、清水さゆり、西尾 千枝、待井かおる、宮島 恵子、三好 明子		
重機等現物提供元	株式会社フォレストコーポレーション(本体工事請負業者)		
遺構測量業務委託	株式会社写真測図研究所		
理化学的分析委託	バリノ・サーヴェイ株式会社		

2 調査日誌抄

- 3月2日 (木) 重機による表土除去作業開始。(～3月4日)
- 3月3日 (金) 隣接地で県埋文センターが調査した周溝墓SM3004の続きを確認する。
- 3月6日 (月) 作業員雇用開始 (～3月28日)。遺構検出開始。新たに周溝墓SDZ 1を検出する。
- 3月7日 (火) 遺構掘り下げを開始する。SB 1、3、SDZ 1、ST 1の掘り下げを開始。
- 3月9日 (木) 廃土場外搬出に関わり、作業休止 (～3月10日)。
- 3月13日 (月) 土日の降雨のため現場水没。終日排水作業を行う。

- 3月15日（水） SB 1、2、SM3004の調査。SB 1 カマド周囲精査。カマド廃棄時に遺棄された土器群検出。
 3月22日（水） 遺構掘り下げをほぼ完了し、SM3004、SB 2、ST 1の測量を行う。
 3月28日（火） 2回目の測量を行い、作業員作業を終了する。翌29日（水）発掘作業終了。機材撤収する。



写真1 発掘調査直前の降雪の現地



写真2 重機による表土除去作業



写真3 遺構検出作業（SM3004周溝検出の様子）



写真4 ドローンによる空中撮影



写真5 調査に従事した発掘作業員

第2章 遺跡環境と周辺調査

第1節 浅川扇状地遺跡群の考古学的環境

桐原牧野遺跡が立地する浅川扇状地は、長野盆地北東部に位置し、標高1,917mの飯縄山を水源とする浅川によって形成された大規模扇状地である（図2）。長野市中心市街地北東の長野市浅川東条付近を扇頂とし、北西から南東方向に下る穏やかな傾斜地で、扇端は南側が長野市西和田付近で裾花川扇状地に接し、東側は長野市富竹・金箱付近で千曲川の後背湿地に接している。

浅川扇状地遺跡群は、浅川扇状地のほぼ全域が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録され、これまで多くの発掘調査が行われている。

縄文時代の遺跡は、扇頂から扇央部にあたる浅川、若槻、吉田地区の浅川沿いに点在する。扇頂部の松ノ木田遺跡（14）はその拠点集落で、前期には块状耳飾りほか多彩な装身具が出土し、石製装身具類の生産が想定されている。中期の集落には檀田遺跡（12）、吉田古屋敷遺跡（6）が、後期の集落には吉田四ツ屋遺跡（7）が確認されている。長野市内では、扇状地上の縄文遺跡群が周知されている。

弥生時代稲作到来の痕跡は、隣接する裾花川扇状地に、前期末から中期前半の新諏訪町遺跡が標識遺跡として確認できる。浅川扇状地における当該期の追究はこれからの課題である。浅川扇状地で弥生時代の開発が進むのは中期後半の栗林期で、檀田遺跡では、栗林Ⅰ式期から集落が成立している。礫床木棺墓を含む木棺墓群が集落に接して営まれる集落景観を呈し、浅川の水利を利用した水田経営が想起される。後期初頭・吉田式土器の標識遺跡は吉田高校グランド遺跡（9）である。後期後半の箱清水式期の集落では、扇央部の檀田遺跡、本村東沖遺跡（11）、長野女子高校校庭遺跡（10）などが拠点集落と想定され、北陸北東部系の法仏・月影式土器が箱清水式土器と共伴する。檀田遺跡の円形周溝墓群では、木棺内に翡翠製勾玉、銅・鉄釧、ガラス小玉が副葬されている。箱清水式期における広域物流ネットワークの一端を窺い知ることができ、当該期の浅川扇状地遺跡群の歴史的背景を読み取ることができる。扇端に近い北長野貨物駅遺跡（清水2017）出土の箱清水式土器は、長い間、箱清水式土器の基準資料とされてきた。

牟礼バイパスA地点遺跡（16）の集落出土土器は、在来の箱清水式土器と外来系の土器が共伴し、箱清水式土器の変容が最終段階として注視され、弥生時代終末あるいは古墳時代初頭と呼ばれてきた時代の土器様式が明らかにされた。吉田四ツ屋遺跡では、当該期の近江系手あぶり土器の搬入が指摘されている。県埋文センターによる北陸新幹線や高田若槻線建設に伴う発掘調査（以下、県北陸新幹線地点、県高田若槻線地点）では、桐原牧野遺跡（1）周辺の古墳時代前期集落にS字状口縁台付甕が散見される。桐原牧野遺跡では、集落に接して墓域も明らかとなり、方形墳丘部の一辺が10mを超える周溝墓が6基以上群集し、規模が突出する墳墓は前方後方型が想定されている。前方後方型の墳墓は、檀田遺跡、吉田四ツ屋遺跡でも想定されている。一辺10m前後の古墳時代前期の周溝墓は返目遺跡（8）、桐原宮北遺跡（3）、吉田古屋敷遺跡に確認される。

古墳時代中期の本村東沖遺跡は、当該期浅川扇状地遺跡群の拠点集落であり、長野盆地における竪穴建物内カマド出現期の様相を示している。石製模造品の研磨製作を行い、古式須恵器や子持勾玉をもつ集落で、古式須恵器を副葬し、合掌形石室を内包する地附山古墳群（13）の築造に関わった集落と想定されている。駒沢祭祀遺跡（17）1号祭祀遺構では、多量の中期土師器とともに900点を超える白玉や石製模造品・鉄器・ガラス小玉が出土した。県北陸新幹線地点三輪二丁目のW7B区（18）では、古墳時代中期前半の竪穴建物に切られる小区画水田

を明らかにした。畦畔地割は、北西から南東方向をとり、周辺の地形傾斜方向と同様である。古墳時代後期集落は90棟の竪穴建物を検出した檀田遺跡を除けば、小規模な遺跡が点在する。湯谷東古墳群（15）は、6世紀末頃、扇状地に構築された7基の古墳群である。

古代の浅川扇状地は全域に遺跡が確認されるが、若槻地区の稲添（19）、二ツ宮（20）、本堀（21）遺跡の集落および仏教関連遺物が注視される。桐原宮北、桐原牧野遺跡では、県高田若槻線地点の調査で比較的規模の大きな集落が明らかとなり、帯金具や筆立て付円面硯・同開珞が出土し、周辺地域に役所の存在が示唆されている。当該遺跡は古墳時代後期から古代まで継続する。桐原牧野遺跡に近接する県北陸新幹線地点W 9区（22）では、8世紀後半を前後する溝区画の内外に、溝と軸線を合わせる掘立柱建物が配置される空間があり注視される。

中世は桐原要害（高野氏館跡）（2）の一部が市、県埋文センターによって調査されている。13世紀中葉～14世紀代の遺物が確認され、15世紀前半の機能停止が想定されている。長野市誌は、『吾妻鏡』文治2（1186）年3月12日条に見える「吉田牧」を桐原地区に比定する。県高田若槻線地点の調査では、古墳時代から中世にかけて32点の馬の骨、7点の牛の骨が、市埋文センター桐原宮北遺跡の調査では、古墳時代後期竪穴建物カマド周辺から馬歯が出土した。牧に関する歴史叙述は、今後の史料の蓄積と解題が課題となる。



1 桐原牧野遺跡 2 桐原要害（高野氏館跡） 3 桐原宮北遺跡 4 吉田町遺跡 A 県新幹線地点 B 県高田若槻線地点 5 中越遺跡 6 吉田古屋敷遺跡 7 吉田四ツ屋遺跡 8 返目遺跡 9 吉田高校グランド遺跡 10 長野女子高校校庭遺跡 11 本村東沖遺跡 12 檀田遺跡 13 地附山古墳群 14 松ノ木田遺跡 15 湯谷東古墳群 16 牟礼バイパスA地点 17 駒沢祭祀遺跡 18 県北陸新幹線W 7B区 19 稲添遺跡 20 二ツ宮遺跡 21 本堀遺跡 22 県北陸新幹線W 9区

図2 浅川扇状地遺跡群の遺跡位置図（1：50,000）

第2節 桐原牧野遺跡周辺の弥生時代後期～古墳時代中期の調査

本調査地点が所在する桐原牧野遺跡周辺は（図3）、これまで、長野県埋蔵文化財センターによる北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財の調査（A：県北陸新幹線地点）が扇状地扇端域を東西に、高田若槻線建設に伴う埋蔵文化財の調査（B：県高田若槻線地点）が扇状地扇中央域を南北に横断する形で実施された。一方、長野市教育委員会は、桐原宮北（3）・桐原要害（高野氏館跡）（2）・桐原牧野（1-1・2・3）遺跡で、民間開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施している。今回の調査では、古墳時代前期の墓域および古墳時代中期の竪穴建物が明らかとなったため、桐原牧野遺跡周辺の弥生時代後期から古墳時代中期についてその調査概要を整理する。

<弥生時代後期～古墳時代前期>

浅川扇状地標高400m前後の扇中央域には、浅川沿いに檀田・本村東沖・吉田高校グランド遺跡等の弥生時代後期の拠点的な集落が点在する。県高田若槻線地点の調査では、路線内調査区1区の北側に位置する標高380m付近の5・6区（吉田田町遺跡）、標高370m付近の2・3区（桐原牧野遺跡）で弥生時代後期の集落が確認でき、前者の吉田田町遺跡集落が後期前半、後者の桐原牧野遺跡が後期後半に位置付けることができる（吉田田町遺跡は図3の北側範囲外）。5区の吉田田町遺跡では路線50mの範囲に同時期の竪穴建物6棟が集住し、単位集落に近い様相を読み取ることが出来る。2・3区の桐原牧野遺跡では、路線200mの範囲に竪穴建物11棟が確認でき、SB105出土資料は、笹澤浩が提示した北長野貨物駅遺跡出土資料（笹澤1970）と同時期としてとらえることができる。1区桐原宮北遺跡の周溝墓SM 5出土土器群は、SB105出土土器群より型的に新しく、箱清水式の壺、高杯の変質を読み取ることができ、長野市松代町北平1号墳出土土器群とともに東海系のインパクトを受ける時期の墳墓出土土器群としてとらえたい。

現在、扇状地扇端域の北長野貨物駅遺跡は中越遺跡に包括して捉えられており、県北陸新幹線地点W 9・10区においても当該期の竪穴建物跡が検出されている。標高360m付近である。浅川扇状地における弥生後期集落は、浅川沿いの扇中央域拠点集落から後期後半期に扇状地扇端の低地帯にむけて散在する傾向を示している。

長野盆地の古墳時代前期土器様式は、箱清水式土器の系譜を引く在来要素が減少し、小型精製土器群と新出系高杯・壺の成立、新たな在来甕の成立様式として捉えることができる。古墳時代前期の集落は、県高田若槻線地点では、標高375m付近の1区（桐原宮北遺跡）・2区（桐原牧野遺跡）に一単位、標高365m付近の4区（桐原牧野遺跡）に一単位が認められる。県北陸新幹線地点でも、標高364m付近のW 8B・C・D区に一単位が認められる。県高田若槻線地点3区には前方後方型（推定）を含む6基の周溝墓より構成される墓域がある。

古墳時代前期に出現した県高田若槻線地点4区と県北陸新幹線地点W 8区の集落は、現在の地表では確認しづらいが、東西の小さな谷に挟まれた北西から南東に傾斜する台地上に位置し、同一集落単位としておさえることができる。弥生時代後期後半に営まれた北長野貨物駅遺跡とともに扇状地扇端付近を選地していることを注視したい。一方、1・2区の前期集落も市の調査と総合すると前期の集落単位としておさえることができる。1・2区周辺の前期集落は弥生後期から継続して営まれ、4区周辺は前期前半から出現する。3区の墓域は4区周辺に出現した集落に関連して造墓された可能性が高い。ここで課題となるのはS字状口縁台付甕（以下、S字甕）の在り方である。桐原宮北遺跡、桐原牧野遺跡の古墳時代前期集落の甕は、くの字状口縁ハケ甕を主体とし、基本は平底甕である。そこにS字甕が共伴し、その比率も高い傾向にある。長野盆地のS字甕は、中央高地に伝播した型式が当該地で変容していると想定される。桐原牧野遺跡のS字甕は、在来の胎土で成形される。口縁部の外反が弱く、上部に立ち上がるプローションをなし、頸部屈曲面内面にハケ調整をせず、肩部外面の横線文が頸部屈曲点近くにまで施文される。古墳時代前期に、生活具のナベとしてS字甕を持ち込んでいる桐原牧野遺跡

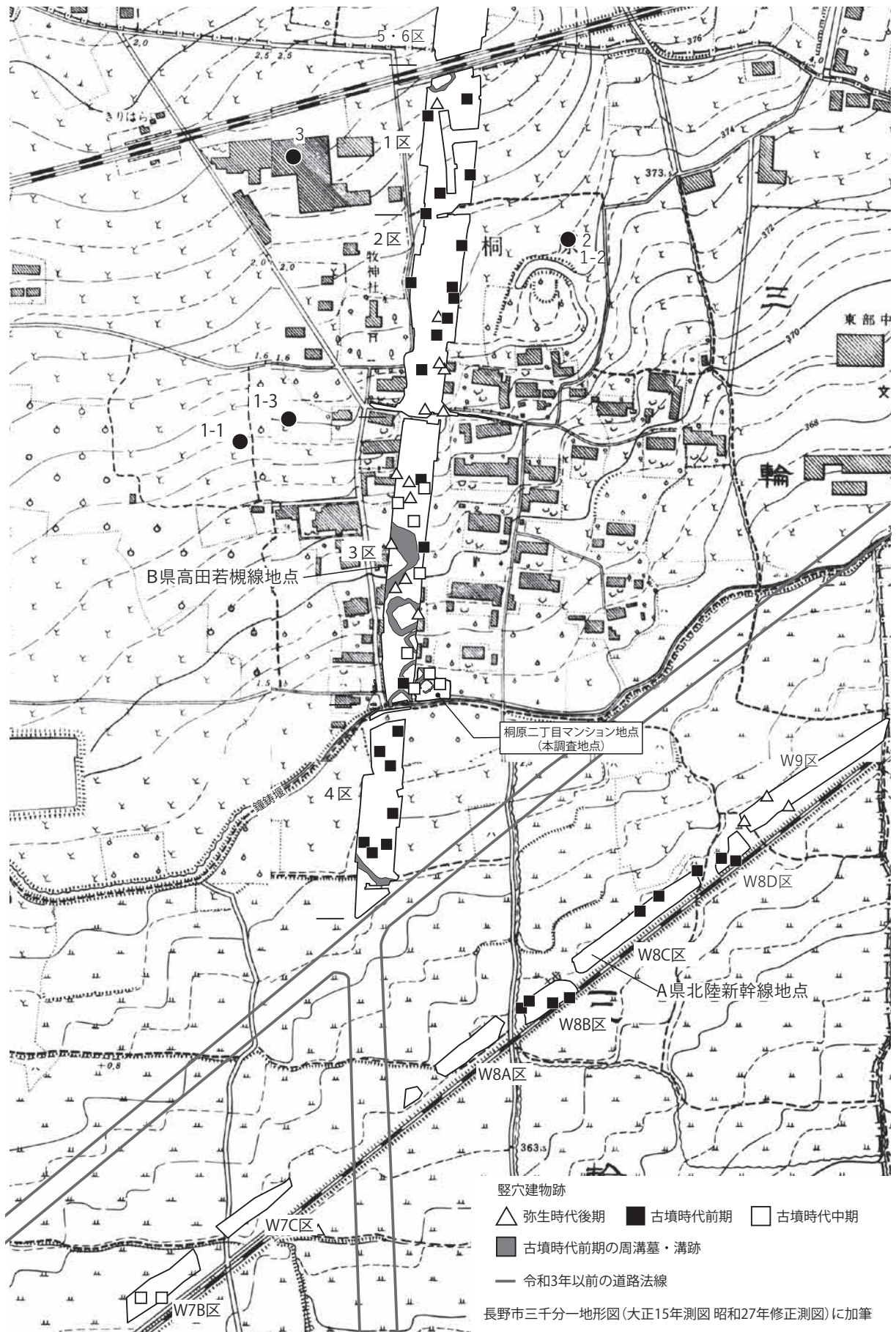


図3 桐原牧野遺跡周辺の調査成果(弥生後期～古墳中期)

周辺の集団を注視したい。

<古墳時代中期>

古墳時代中期の集落動向を県北陸新幹線地点と県高田若槻線地点の調査から垣間見たい。弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけてB県高田若槻線地点1～4区に散在的に広がりをもせていた集落は、古墳時代中期前半には路線内には確認できず、中期後半に至り3区に収斂する形で出現する。一方、古墳時代中期前半の集落はA県北陸新幹線地点W7B区に確認できる。この動きは、弥生時代後期後半から顕在化する低地帯の開発と関連する可能性が高く、扇状地中央部の拠点集落から分村した一端とも考えられる。桐原牧野遺跡の南方の標高350m付近の扇状地端部の平林東沖遺跡では、古墳時代中期から後期へと継続する集落を認めることができる。

桐原牧野遺跡の古墳中期集落は、カマド出現期の住居構造、土器様式等、当該期の人々の生活を考える上で大切な基礎的資料を提供している。浅川扇状地遺跡群の中期集落には、須恵器が比較的多く出土する集落が認められるが、その一方で、桐原牧野集落に須恵器は目立たない。浅川扇状地内における古墳時代中期集落の諸相を示している。

笹澤浩 1970 「箱清水式土器の再検討—長野市内発見資料を中心として」『信濃』第3期第22巻第4号 信濃史学会

A 長野県埋蔵文化財センター 1998 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5 —長野市内その2—浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書34

B 長野県埋蔵文化財センター 2021 『長野市 浅川扇状地遺跡群 (都)高田若槻線 長野市 桐原～吉田 (1)』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書130

3 長野市教育委員会 2012 『浅川扇状地遺跡群 桐原宮北遺跡』長野市の埋蔵文化財第130集

1-1 長野市教育委員会 2016 『浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡』長野市の埋蔵文化財第143集

2 長野市教育委員会 2016 『浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡 (2)・桐原要害 (高野氏館跡)』長野市の埋蔵文化財145集

清水竜太 2017 「第3節 いわゆる「国鉄貨物基地遺跡」と「国鉄車両基地遺跡」について」

『浅川扇状地遺跡群 中越遺跡 (2)・徳間番場遺跡 (2)』長野市の埋蔵文化財第148集 長野市教育委員会

1-3 長野市教育委員会 2021 『浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡 (3)』長野市の埋蔵文化財第159集

第3章 調査成果

第1節 調査概要

調査地は、長野市中心市街地北東部、長野電鉄桐原駅の南東約400m、長野都市計画道路高田若槻線と鐘鋳堰との交差付近の吉田地区桐原に位置する。本調査の実質調査面積は299㎡である。調査地は、江戸時代後期の「文政八年桐原村絵図面」に「家数四拾軒」と表記された村内に位置し、絵図に村の西側を北西から南東に下る道に沿う西沢堰が鐘鋳堰と交差する付近である。この景観は大正15年測図昭和27年修正測図の長野市3千分の1地形図でも読み取ることができ（図3）、集落の周囲緩斜面には桑畑が、鐘鋳堰より南側は水田が広がっている。調査区の土層堆積状況は、調査区東壁付近が自然堆積を示すため基本層序とした（図4）。西壁付近では、基本層序Ⅱ層内の掘り返しや暗渠、水路に由来するグライ化土層がⅢ層を掘り込む様子が看取された（図9、11）。

調査は、地表下約50cmに中世以降の遺構を想定し、基本層序第Ⅲ層黒褐色土層上面で面的精査を行ったが、確認できなかったため、地表下約80cmのⅣ層にぶい黄褐色砂質シルト層上面で遺構検出を行った。遺物包含層はⅢ層黒褐色土層で、その下層から古墳時代の土器を検出したが、他時期の遺物はほとんど認められなかった。当調査区は桐原村の集落中心区に位置し、近代以降の住宅や道路、水路等の掘り込みが基本土層Ⅱ層内に確認でき、Ⅲ層遺物包含層まで達している場所も認められた。

調査区全体で確認した遺構は、竪穴建物跡3棟、掘立柱建物跡1棟、周溝墓2基、小穴16基、土器集積4箇所、河川跡1条である。時期は、周溝墓2基が古墳時代前期、竪穴建物跡3棟、土器集積3箇所が古墳時代中期後半、掘立柱建物跡1棟、土器集積1箇所が古墳時代後期後半である。Ⅲ層および遺構から出土した遺物は土師器と少量の砥石などの石製品である。土師器はすべて古墳時代の土器で、須恵器片は確認できない。本調査区周辺では、高田若槻線に関わる発掘調査を県埋文センターが行っており、弥生時代後期、古墳時代前期の集落および墓域、古墳時代中期～後期の集落が明らかとなっている。隣接する県高田若槻線地点3区で調査された古墳時代前期の周溝墓SM3004、古墳時代中期竪穴建物SB3063は、調査区外未調査部分について、今回の調査で明らかにすることができた。

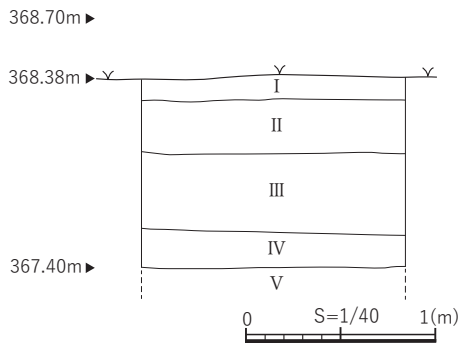


図4 調査区東壁土層断面図（基本層序）

土層説明

- I層 Hue10YR 5 / 3 にぶい黄褐灰色粘質土
- II層 Hue10YR 4 / 2 灰黄褐色壤土（Ⅱ層に対応）
- III層 Hue10YR 3 / 1 黒褐色壤土（Ⅳ層に対応）
- IV層 Hue10YR 4 / 3 にぶい黄褐色砂質シルト
- V層 Hue10YR 5 / 4 にぶい黄褐色砂質シルト



写真6 調査区東壁土層（基本層序）

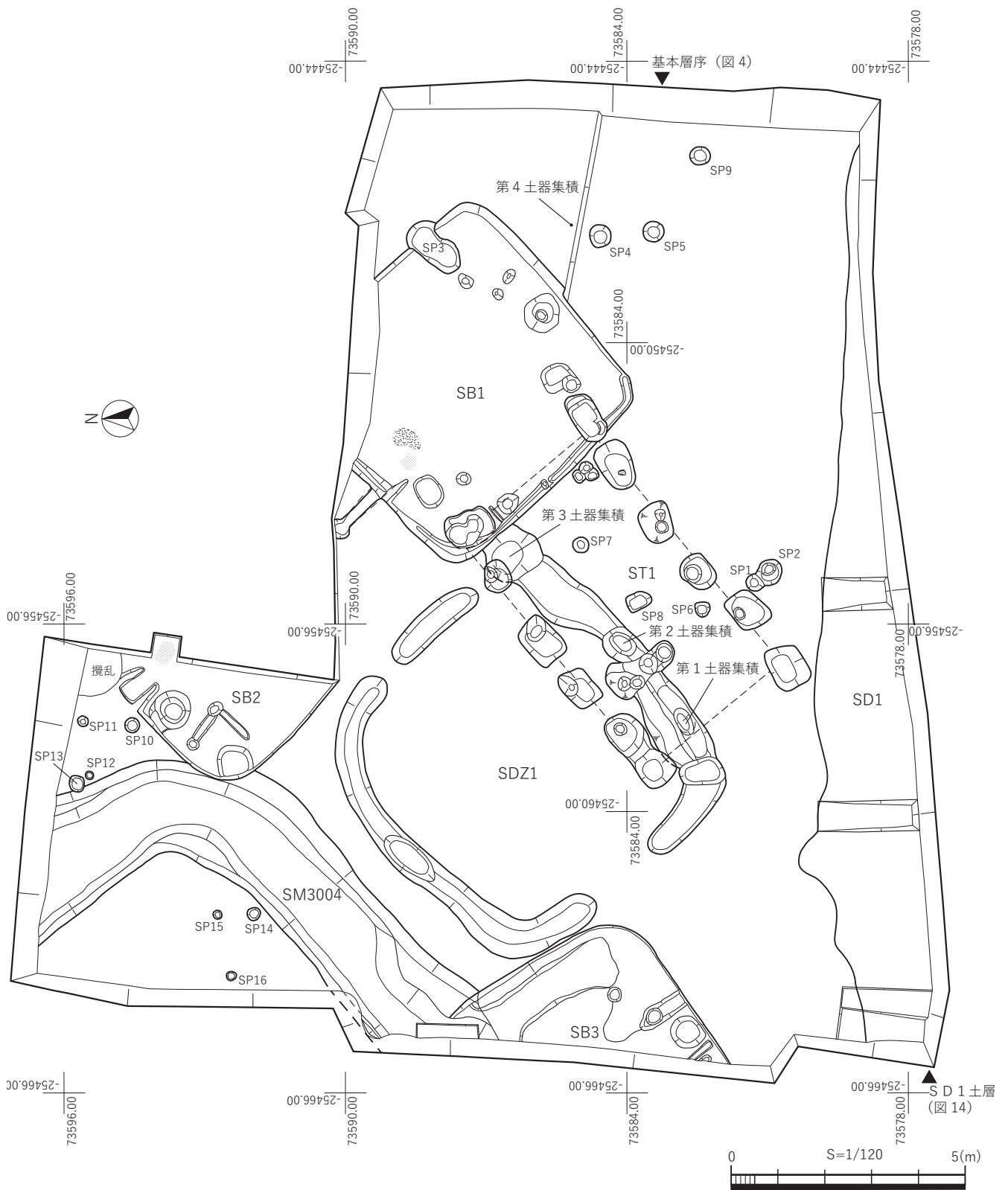


图5 調査地全測図



写真7 調査地点から北長野貨物駅遺跡遠望



写真8 調査地点の古墳時代周溝墓と竪穴建物跡

第2節 遺構

1 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡・SB 1（図6、写真9～11、図15～17）

調査区東側で検出された竪穴建物跡で、一部北東コーナー付近は調査区域外となる（図5）。南西コーナー付近は、重機による検出時に深く掘り下げたため壁面が浅い。主軸をN-43°-Wにとり、南西辺6m、南東辺5.9mの隅丸方形プランの建物である。掘立柱建物跡ST 1と重複し、ST 1より古い。確認面からの掘り込みは、カマド煙道の立ち上がり確認面とカマド燃焼部とのレベル差が38cmで、床面の深さは40cm以上あったと想定される。遺構のプランは、基本層序IV層にぶい黄褐色砂質シルト層を掘り込み、遺構覆土に黒褐色粘質土が落ち込んでいたため明瞭に確認できた。

カマドは北西辺壁中央に位置し若干西側に寄っている。左袖は残りがよかったが、右袖はほとんど検出できなかった（写真10）。カマド前面右には灰の分布が観察された。石材は認められず、石芯カマドではないと判明した。燃焼部被熱面は、奥壁から90cm内側に径30cmの円形に硬化する。その奥壁側には、支脚に転用されたと想定される屈折脚高杯（35）が杯部を伏せた状態で埋置されていた。原位置を示すものと思われる（写真10）。支脚に接して蓋（31）、甕（60）が破片で出土した。煙道は床面から8cm上部に径25cmほどの掘り込み面があり、傾斜角8度ほどで、1.1mの煙道部の先端が径40cmほどの小穴となって立ち上がる。

カマドに付随して、左袖外側床面には70×56cmの隅丸方形の小穴P 7があり、深さは22cmである。カマド左側の床面では、土器が完形に近い状態で検出された（14、27、30、52）。30は完形の蓋で、カマド袖上に逆位で、27はほぼ完形の高杯で床面直上に横位で、52は胴下半部がほぼ完形の壺で床面直上正位に、14は完形の杯で床面直上正位で出土した。

床面は硬緻である。付属施設は土坑および小穴8基と間仕切り溝1条である（図6）。主柱穴はP 3（深さ23cm）、P 8（深さ11cm）、P 9（深さ39cm）で、柱穴間は3m。もう一つの主柱穴は調査区外に所在すると思われる。主柱穴内側の床面は固い。P 8-P 3ラインと壁の間の床面は、中央部より3～5cmほど高く、壁面下に幅



写真9 第1号竪穴建物跡・SB1



写真10 カマド内支脚高杯出土状況



写真11 P1、土器17、51出土状況

15cm、深さ6cmの周溝が回っている。P5の脇には、幅10cm長さ50cmの間仕切り溝が壁から伸びている。P1は入口施設で、径80cmの楕円形を呈し、深さは40cmを測る。底面には径24cm、深さ7cmのピットがある。P1脇の床面には、打ち欠かれた壺(51)の胴下半部が伏せた状態で出土した(写真11)。同壺の破片は建物跡中央の床面および覆土中にも散らばり、頸部付近まで復元できた。P1周辺の覆土下層からは、胴部に焼成後打ち欠き穿孔がある杯と鉢(9、17)が出土した。甕65は上層より出土した。

P1から南東コーナー付近および北東壁周辺の床面は、中央部より2~3cmほど低い。P10(深さ26cm)、P2(深さ20cm)は対になる可能性がある。SP3は同竪穴建物の壁面から床まで達し、P2と重複するが、新旧関係は不明である。遺構の時期は古墳時代中期後半と考えられる。

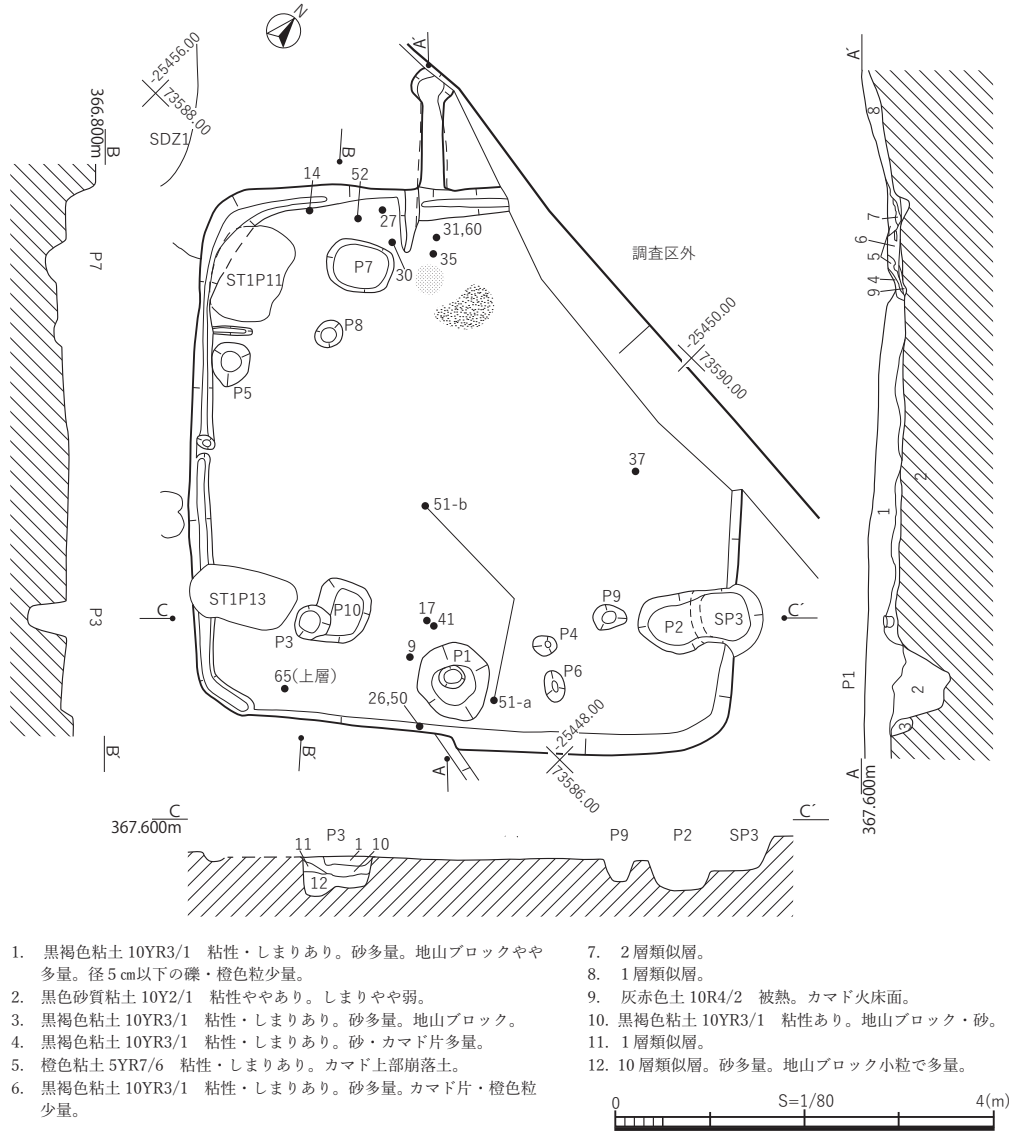


図6 第1号竪穴建物跡・SB1実測図

第2号竪穴建物跡・SB2 (図7・8、写真12・13、図17・18)

調査区北西側で検出された竪穴建物跡で、東側は調査区域外となる(図5)。南東側は重機による検出時に確認ができなかった。主軸をN-44°-Wにとる建物で、北西・南西辺が各3.5m調査区内に明らかとなった。1辺6mほどの隅丸方形プランが想定される。古墳時代前期の周溝墓SM3004周溝上に西側コーナーが重複し、SM3004より新しい。確認面からの掘り込みは12cmを測り浅い。カマドは北西辺に位置する。内壁被熱面の幅は

およそ45cmで、燃焼部被熱面が奥壁より1.3m手前に位置するところから、細長い構造が想定される。燃焼部被熱面は30×50cmの楕円形に硬化する。カマド廃棄時には、燃焼部周辺の袖や天井部は取り除かれ、燃焼部周囲に土器や構築石材を遺棄している（図8、写真13）。甕4個体（84～87）と鉢1個体（70）、石材2個が破碎され、土器群中央部下層には、完存の高杯（73）が杯部を伏せた状態で埋置されていた。石材は裾花凝灰岩（発泡のある流紋岩）の河原石で、破断面をもつが接合はしない。被熱しているが原位置を示していない。焚口に付随した磔を廃棄時に遺棄したのものであろう。床面は硬緻である。付属施設は、土坑および小穴4基と間仕切り溝2条である（図7）。P1はカマド脇の土坑で、深さは50cmを測る。P2はコーナー付近の浅い土坑で、深さは10cmを測り、深さ5cmの間仕切り溝に囲まれる。埋土は黒褐色土が充填し凝灰岩製砥石（168）と土器片が出土した。P3は主柱穴と想定され深さは32cmである。床面上からは2cmほど浮いて炭化材（1・2）、広口壺口縁部（77）、小型壺（79）が出土した（図7）。炭化材1は角材で、幅7×4cm、長さ42cmを測る。年代測定を実施し、5世紀～6世紀初頭という分析結果が出ている（第4章第1節）。遺構の時期は古墳時代中期後半と考えられる。

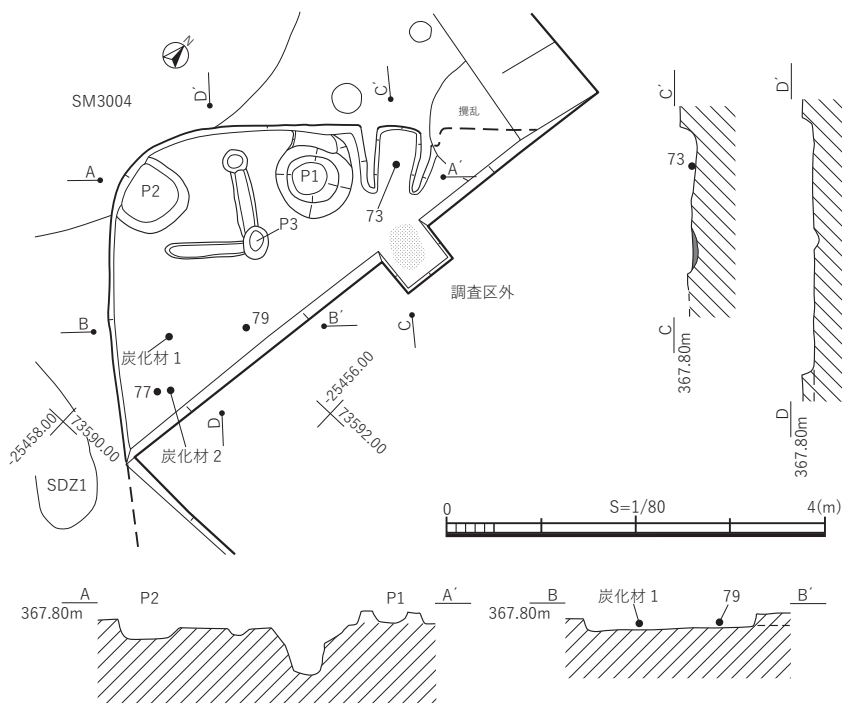


図7 第2号竪穴建物跡・SB2実測図

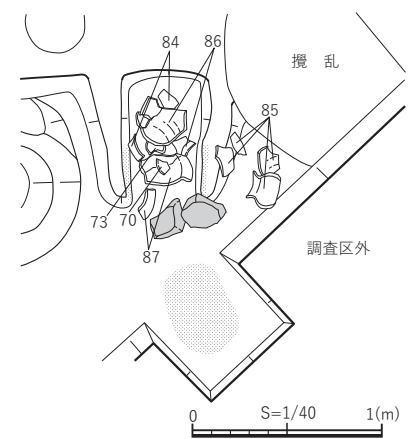


図8 SB2カマド内土器出土状況実測図



写真12 第2号竪穴建物跡・SB2、SM3004



写真13 カマド内土器出土状況

第3号竖穴建物跡・SB3 (図9、写真14、図18・19)

調査区南西側で検出された竖穴建物跡で、西側半分は調査区域外となる(図9、写真14)。県埋文センターが隣接地で発掘調査を行った県高田若槻線地点3区では、竖穴建物跡SB3063として北西コーナー部分が調査された。主軸をN-33°-Wにとる建物で、北東辺4.8m、南東辺4mが明らかとなった。北東辺5m×南東辺6m程の隅丸長方形のプランが想定される。古墳時代前期の周溝墓SM3004周溝上に北東コーナーが重複することからSM3004より新しい。掘り込み面はⅢ層黒褐色土下層で、床面まで16cmを測る。カマドは未調査区の北西



写真14 第3号竖穴建物跡・SB3

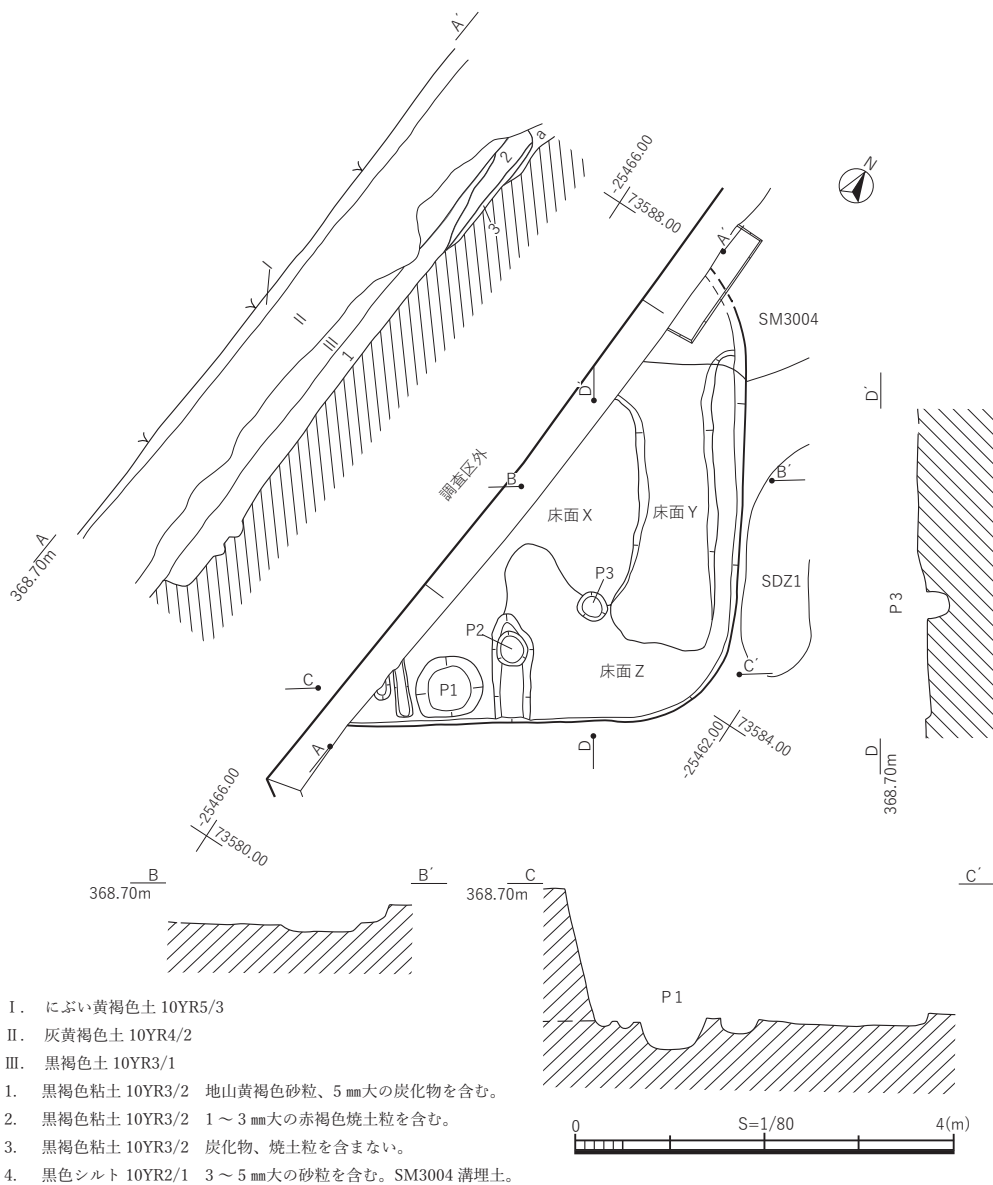


図9 第3号竖穴建物跡・SB3実測図

辺壁に付設されていると思われ、北側の埋土2層に焼土粒の散布が認められる。床面は中央部がやや高く硬緻である（床面X）。南東コーナー床面は、中央部より5cmほど低い（床面Z）。壁際には周溝は認められない。北東辺壁より10cm離れて、幅30～40cmほど床面が5cm低く、緻密な黒褐色土が充填していた（床面Y）。付属施設は、土坑および小穴2基と間仕切り溝3条である。P1は入口の土坑で、深さは20cmを測る。竪穴建物跡と同様な黒褐色土が充填し、内面黒色処理杯片（94）が出土した。深さ5cmの間仕切り溝に囲まれる。溝と土坑の埋土は同様である。P2の深さは15cm。P3は主柱穴で、深さは10cmを測る。出土遺物や遺構の様相から、遺構の時期は古墳時代中期後半と考えられる。

2 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡・ST1（図10、写真15～18、図19、表1）

調査区中央で検出された掘立柱建物跡である（図5）。基本層序IV層（図4）において黄褐色砂質シルト上面にて検出を行ったところ、SB1、SDZ1と同様に基本層序III層黒褐色土が落ち込み、遺構が確認された。検出の結果、土坑状の大形掘り方の柱穴で梁間1間×桁行5間の掘立柱建物跡が明らかとなった。主軸をN-51°-Eにとる。覆土は基本層序黒褐色土をベースとし、地山土のにおい黄褐色砂質シルトがブロック状に若干混入する。重複関係は、ST1-P13とSB1壁面との切り合い関係の所見からST1がSB1よりも新しい。

土坑状の大形柱穴は、ST1-P7、P8のように80～100cm×70cmほどの隅丸方形を基調とするが、P9のように規模の小さな円形志向の掘り方もある。P6・10は長軸180cmの布掘り底部に2つの掘り方をもつ。深さは40cm～60cmで、底面は平坦である。底面には、径25～30cm、深さ5cmほどのピットをもつものや、P1のように平石を敷くものがある。建築柱材は、底面のピットの形状から、径25cm前後の部材が想定される。

柱穴からは、合計で125片0.8kgの土器片が出土し、すべて古墳時代の土師器で古代の土器片は含まれていない（表1）。検出および覆土の状況、県高田若槻線地点の調査を含め、周辺に古代の遺構が確認されずに弥生時代から古墳時代後期の遺構のみが確認されること、ST1出土の土器破片が古墳時代中期～後期新相を示すことから、古墳時代後期新相の建物跡と考えたい。



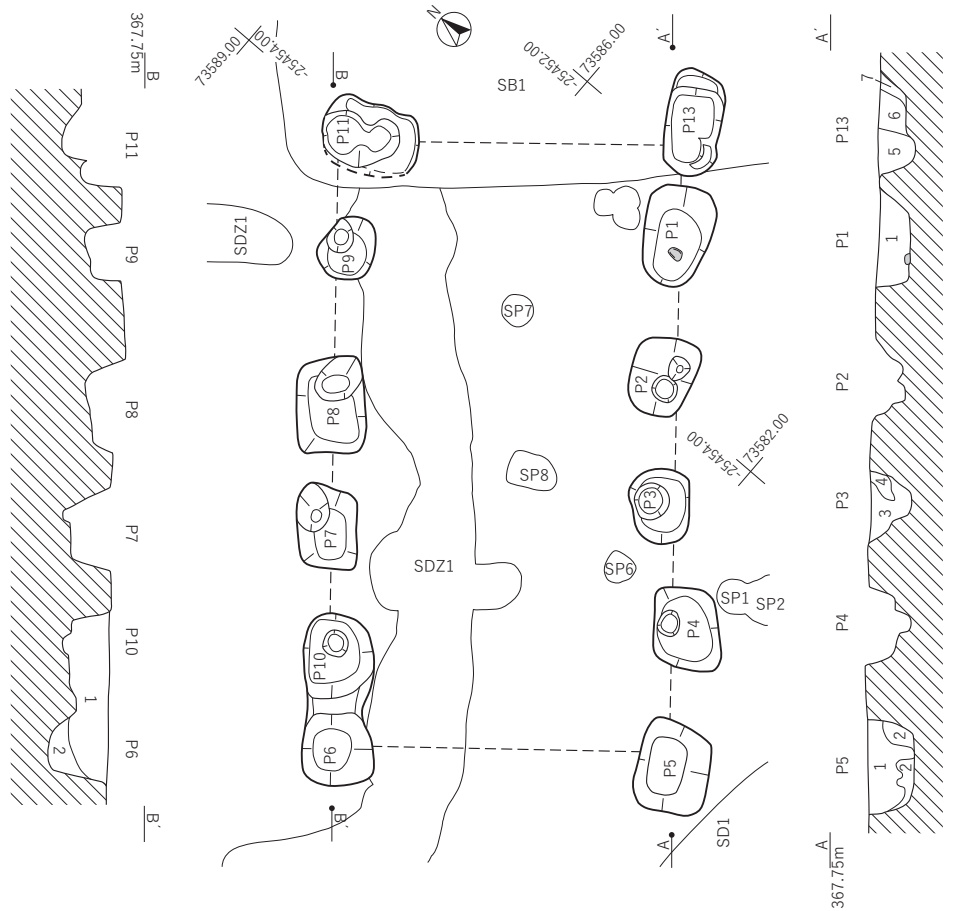
写真15 第1号掘立柱建物跡・ST1



写真16 掘り方・P3



写真17 掘り方・P4



1. 黒褐色粘土 10YR3/1 しまり・粘性あり。砂礫多量に含む。地山ブロック (黄褐色 10YR5/6) やや多量に含む。(県調査V層)
2. 黒褐色粘土 10YR5/6 しまり・粘性あり。砂多量、橙色粒含む。
3. 黒褐色粘土 10YR3/1 しまりあり、粘性弱。砂・小礫多量、橙色粒含む。
4. 黄褐色粘土 10YR5/6 地山ブロック含む。
5. 黒褐色粘土 10YR3/1 しまりあり、粘性やや弱。砂多量、橙色粒含む。柱痕。
6. 黒褐色粘土 10YR3/1 粘性あり。地山ブロック、砂含む。
7. 黒褐色粘土 10YR3/1 粘性あり。地山ブロック多量、砂含む。

図10 第1号掘立柱建物跡・ST1実測図



写真18 ST1、SB1、SD1

P	重量 (g)	破片数	所見
1	17.2	3	
2	25.1	10	櫛描波状文
3	15.2	4	外面ケズリ→ハケ甃片
4	101.3	29	外面ケズリ甃片、内外面ミガキ杯片
5	201.4	32	外面ハケ・ケズリ甃片
6	131.6	14	外面ハケ甃片
7	15.6	3	外面ハケ甃片
8	23.4	6	
9	47.4	5	外面ケズリ甃片、高杯脚部片
11	191.9	10	外面ハケ甃片、蓋
12	31.4	9	外面ハケ甃片
	801.5	125	

表1 ST1出土土器観察表

3 周溝墓

周溝墓3004・SM3004 (図11、写真19～21、図19)

県埋文センターが隣接地・県高田若槻線地点の発掘調査で調査した周溝墓で、今回、未調査部分について調査を行った(図3、23、写真19)。遺構略記号は県のSM3004をそのまま継承した。調査区北西側で検出され、調査区西壁(写真20)および北壁(写真21)で土層断面を確認した。県が調査した古墳時代前期竪穴建物SB6040を切り、今回調査した古墳時代中期竪穴建物SB 2、3(県調査SB6063)に切られる。よって、SM3004はSB 2、3より古い。

墳丘は方形を呈し、主軸をN-40°-Wにとる。規模は周溝基底部の一辺が11m、周溝幅を含めると16mほどに復元される。本調査では墳丘基底を北東辺側4.2m、南東辺側6.4mを調査した(図11、写真19)。県と今回の調査で、北東辺側で6mほど、南東辺で4mほどは未調査となった。周溝は断面逆台形を呈し、外周側に比べ墳丘側は強い傾斜で立ち上がる。溝幅は検出面で2mほどを測り、北東辺でやや広がりかけている。周溝の外周辺は北西・南西辺で弧状に膨らみをもち直線的ではないため、北東辺も同様な形状を示すと思われる。底面幅は1mほど、深さは50～60cmを基調とするがコーナー部分ではやや狭くなる。南東辺では、南側コーナーから5mの付近から底面幅が60cmほどに細くなり、外周側が段をもって立ち上がる。南側コーナーが未調査区にかかり明らかなでないが、同部に緩やかな鞍部・通路が意識されている可能性がある。

埋葬主体部・墓壙等は、県の調査で確認されていない。また、今回の調査では主体部の部分にあたらなため、墓壙等の確認はない。県報告の攪乱部分あるいは未調査部分に主体部が位置していると考えられる。同周溝墓がかかる調査区西壁、北壁の土層観察では、周溝墓上には地表から0.8～1m下に、基本層序Ⅱ層およびその内部の攪乱層が認められ、暗渠排水管の掘り方などがⅢ層や墳丘まで達しており、墳丘方台部の様子は充分に明らかにできなかった(第11図)。周溝の検出は、Ⅳ層上面で行い、周溝内にはⅢ層と同質の黒褐色土が落ち込んでいた。墳丘上には黄褐色土を含む盛土が10cmほど認められ、その上部に古墳時代中期の土器を含むⅢ層黒褐色土が覆っており、古墳時代中期の竪穴建物跡の埋土もⅢ層同質の黒褐色土である。古墳時代中期後葉の竪穴建物跡は周溝墓群の墳丘上に構築はなく、溝上に構築されていることから、古墳時代中期後葉には周溝の埋没は進行しながらも墳丘区画は意識されていたと思われる。周溝墓の墳丘は、Ⅲ層の時間内で失われたものと想定され、古墳



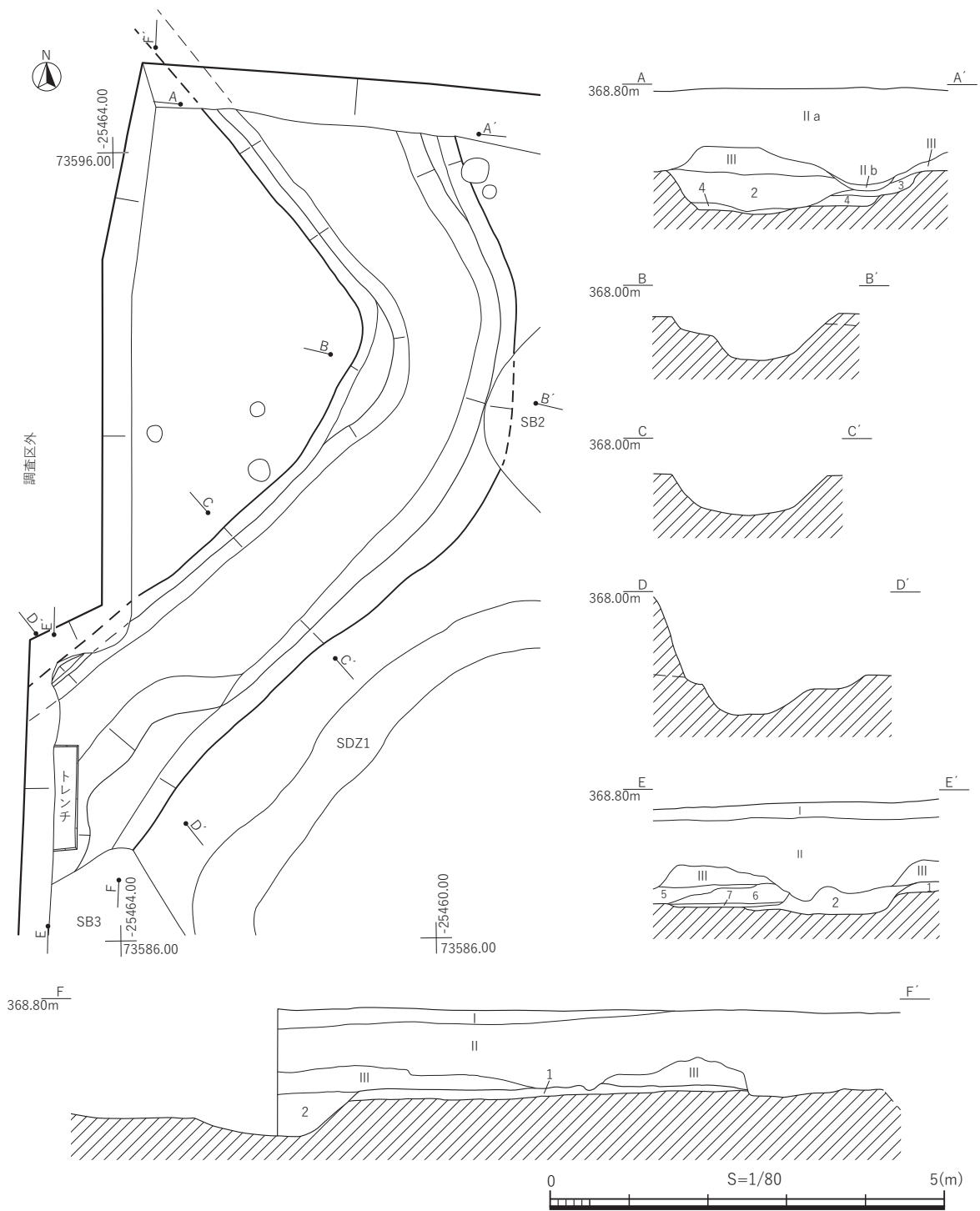
写真19 周溝墓3004・SM3004



写真20 周溝西壁



写真21 周溝北壁



- | | | | |
|-------|------------------------------|----|--|
| I. | にぶい黄褐色土 10YR5/3 表土。 | 3. | 灰オリブ色粘土 7.5Y6/2 |
| II. | 灰黄褐色土 10YR4/2 | 4. | 青灰色砂 5BG6/1 |
| II a. | 粘質土 | 5. | 黒褐色粘土 10YR3/2 地山黄褐色砂粒、5 mm大の炭化物を含む。SB3-1層。 |
| II b. | グライ化が進んだ粘質土 | 6. | 黒褐色粘土 10YR3/2 1~3 mm大の赤褐色焼土粒を含む。SB3-2層。 |
| III. | 黒褐色土 | 7. | 黒褐色粘土 10YR2/2 炭化物、焼土粒を含まない。SB3-3層。 |
| 1. | 黒褐色粘土 10YR3/2 墳丘盛土。 | | |
| 2. | 黒色シルト 10YR2/1 3~5 mm大の砂粒を含む。 | | |

図11 周溝墓3004・SM3004実測図

時代後期までには失われていたと考えたい。県埋文センターの調査では周溝から多量の土器が出土した。それらについてA・Ba・Bbに分類した(第4章第2節)。南西辺周溝底部からは小型精製土器群の小型高杯、結合器台、広口壺とともに小型鉢が埋置に近い状態で、その近くには大型精製広口壺が墳丘直下から出土した(A群)。これらの土器群はほぼ完形に復元され、埋葬後の儀礼行為の一端を物語っている。北西辺では周溝底部より若干浮いた状態で、径20cm前後の礫とともに破碎状態の土器が比較的多く出土した(B群)。ある程度復元できるもの(Ba群)と破片(Bb群)とに大別できる。ハケ調整くの字口縁甕が主体で、煮沸具ともに精製壺、小型器台、鉢、高杯が僅かながら含まれる。一方、今回調査した北東、南東辺周溝では、流入と思われる土器片21点が底面より浮いた状態で出土したにすぎない。A群を墳墓造営に関わる儀礼行為土器群、B群をa-墳墓周辺で行われた儀礼行為土器群、b-周辺からの流入土器群とみたい。A群とBb群については、若干の時間差を考慮する必要がある。

第1号周溝墓・SDZ 1 (図5、12、写真22、25)

調査区中央で、周溝墓SM3004南東側に重複することなく検出された陸橋中央部型の周溝墓である(図12、写真22)。市埋文センター遺構略号SDZを用いた。SM3004周溝上に構築される中期の堅穴建物SB 3に近接するが、重複することはない。周溝南東辺検出レベルは、重機掘削時にやや深く掘り下げているため、北西辺より10～15cm程低くなっている。

墳丘方台部は隅丸長方形を呈し、主軸をN-43°-Wにとり、SM3004に並列する。その規模は、周溝基底辺一辺が主軸6.4m、短軸6m、周溝幅を含めると主軸7.3m、短軸7mである。周溝は断面逆台形を呈し、外周側に比べ方台部側の立ち上がりがやや急になる。溝幅は検出面で60～90cmを測るが、南東辺では幅1mほどの部分も認められた。周溝の深さは30～40cmを測る。墳丘および埋葬主体部は検出することはできなかった。周溝内より出土した土器は、周溝覆土上層に位置するところから、周溝埋没後の掘り込みに遺棄された土器群であり、周溝墓構築時期を示すものではない。周溝内から本遺構に伴う遺物は認められないが、遺構の形態から古墳時代前期の周溝墓と判断したい。

周溝墓SDZ 1内土器集積(図12、13、写真22～25、図20、21)

SDZ 1の南西側周溝(図12)からは、遺構検出時より焼土および土器がまとまって出土する地点があり、そのほとんどが古墳時代中期後半の土器であったため、当初、SDZ 1が古墳時代中期の方形プランの古墳ではないかと考えて調査をすすめた。しかしながら、土器の多くが周溝覆土上層、あるいは周溝を後に掘り込んだ小穴から出土したため、SDZ 1に伴う土器群ではないと判断した。これらの土器群は、墳丘構築以後の土器遺棄行為としてとらえ、第1～第3土器集積とした。これらはSDZ 1周溝墓に伴う土器ではない。SDZ 1に伴う土器は確認できなかった。

SDZ 1周溝の覆土は基本層序Ⅲ層と同質の黒褐色土で、検出時に小穴等の判別はできなかった。遺物の出土状況や周溝底面の様子から、墳墓構築時あるいは周溝埋没過程で掘りこまれた小穴の存在が明らかとなった。SDZ内-P 1～P 5は周溝埋没過程で掘りこまれた可能性が高いが、覆土が同質で検出時にプランは判別できなかった。



写真22 第1号周溝墓・SDZ1

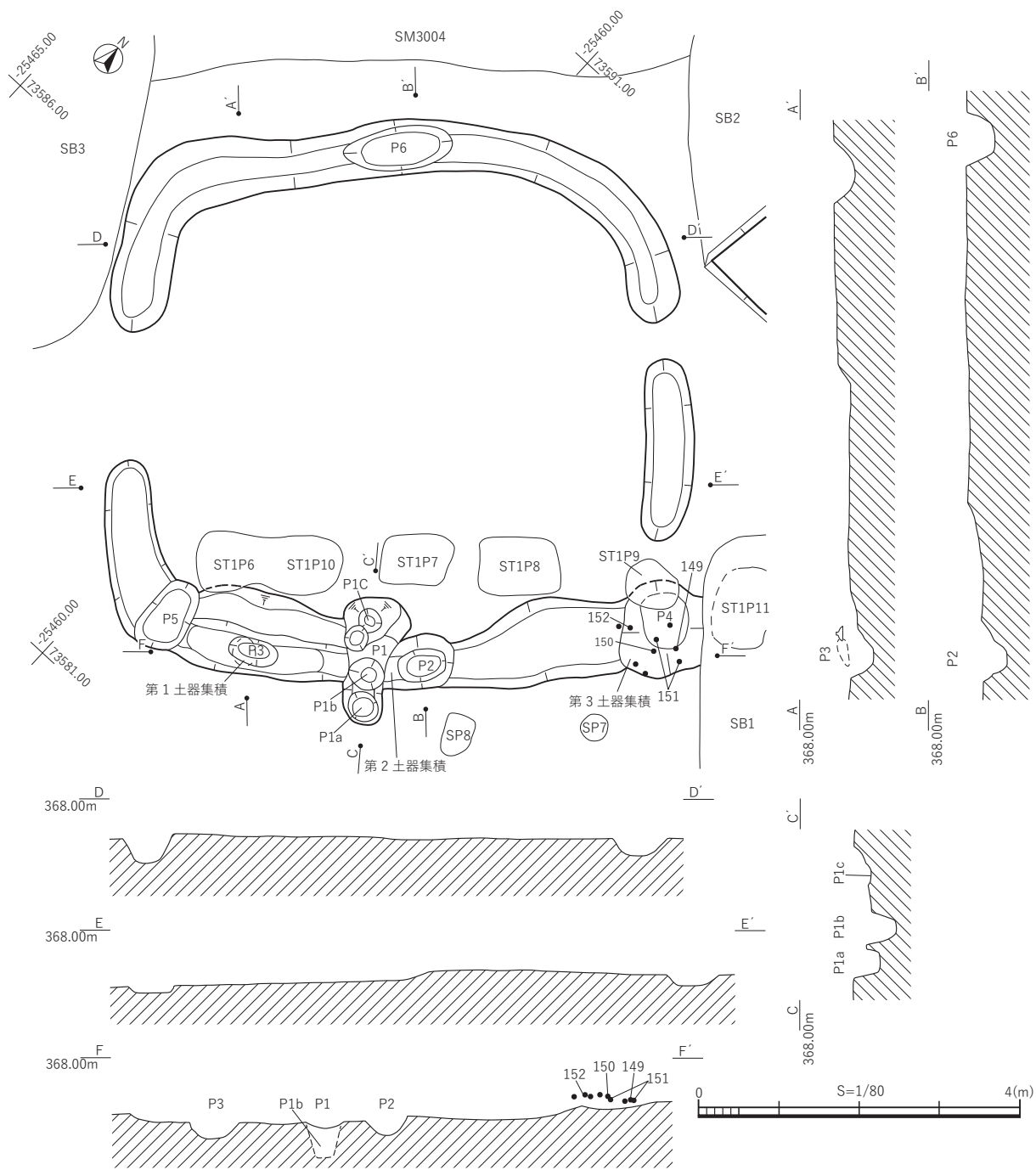


图12 第1号周沟墓·SDZ1、SDZ1内土器集積实测图



写真23 第1土器集積・高杯（130）出土状況



写真24 第3土器集積・土器および石材出土状況

SDZ内-P 1は周溝に直交する形で1.6×0.7mの範囲で0.9kgの土器片が集積し、周溝底部からの深さがP 1 a（径16cm）、P 1 b（径30cm）、P 1 c（径6 cm）の小穴が明らかとなった。P 2は周溝底部を20cmほど掘り込む小穴で、検出面で80cm×70cmほどの楕円形プランであったと思われる。P 1、P 2覆土には若干の焼土粒が含まれ1.6kgの土器片が集積していた。これらの土器群（138～146）を「第2土器集積」とした（図12）。P 3上層には、検出面より約10cm上部に完存する高杯杯部（130）が伏せて埋置され、その上部および周囲に厚さ3cmほどの焼土ブロックが堆積していた（写真23）。この焼土や0.5kgの土器（121～137）の広がり「第1土器集積」とした（図12）。P 4は明瞭なプランが検出ができなかったが、周溝底部がゆるやかに窪み、その上層に土器群と石材が集中した。覆土は周溝埋土と同質の黒褐色土で、土器や石材は底面より5～10cm浮いた状態で出土した。152の周辺には若干の焼土粒が確認された。この焼土や2kgの土器（147～152）の広がり「第3土器集積」とする（図12、13、写真24）。P 5は周溝底部より10cm掘り込まれる。P 6は周溝底面を10cmほど掘り込んでいる。各土器集積の時期は、第1・2土器集積が古墳時代中期、第3土器集積が古墳時代後期の様相を示している。

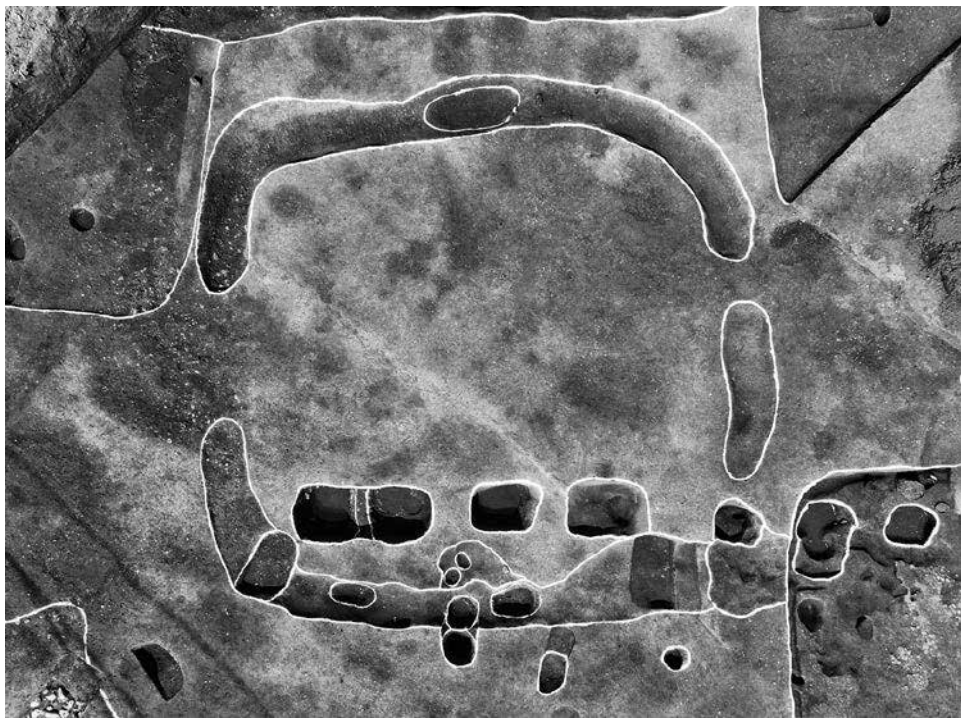


写真25 SDZ1、ST1、土器集積1～3

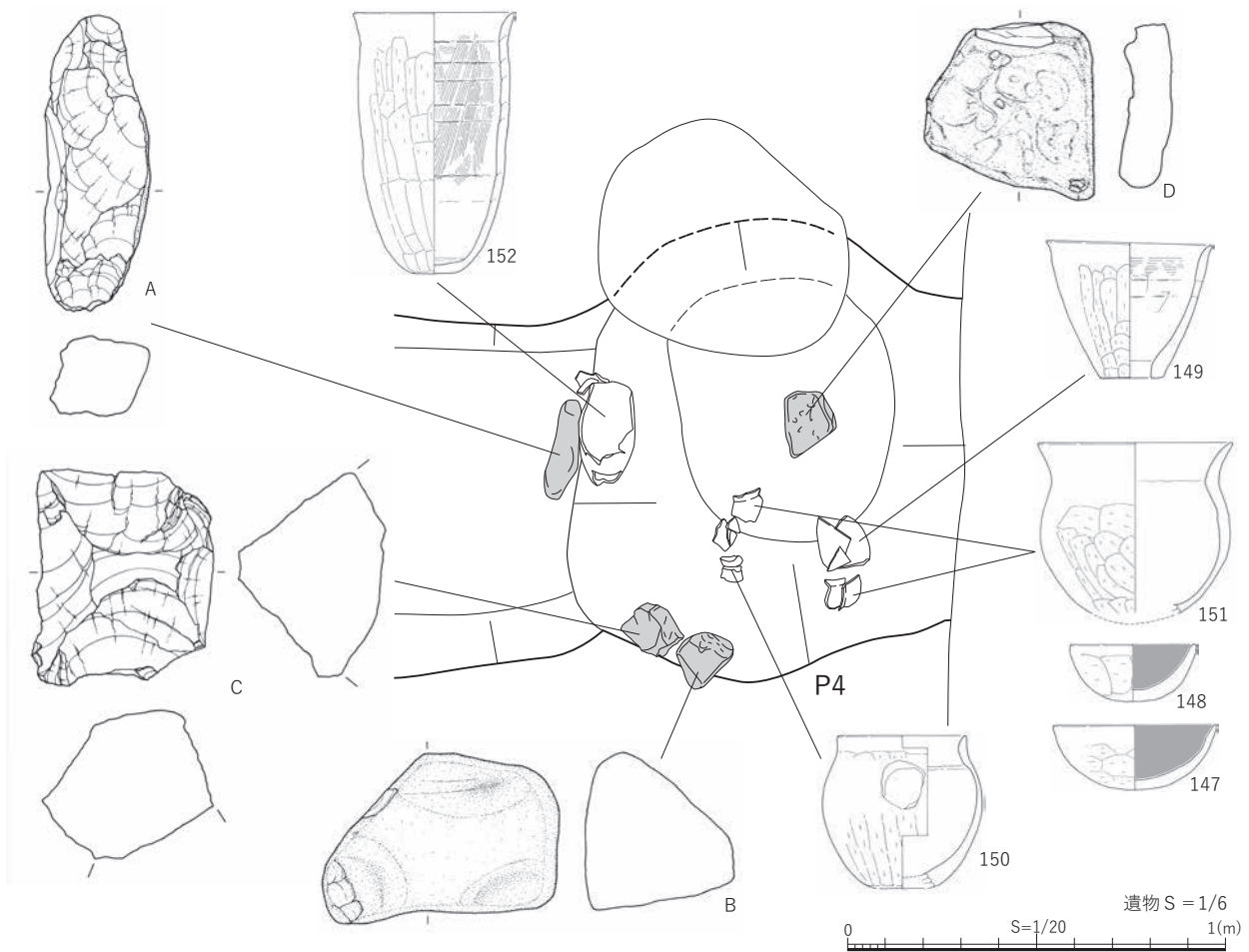


図13 第3土器集積・土器、石材出土状況実測図

第3土器集積、土器・石材出土状況

第3土器集積からは、10～20cm大のやや小型の土器6点（147～152）と、15～20cm大の石材4点（A、B、C、D）が共伴して出土した。甕152、石材A周辺には焼土粒の散布が認められたから若干の火焚行為が想定される。

石材Aは裾花凝灰岩に由来する流紋岩の川原石で、浅川の河原で採取できる。自然面の4面をもち、手で握るにはちょうど良い。先端に敲打痕が観察できる。一部に煤の付着が認められる。石材Cは流紋岩の川原石で、5面の剥離面と1面の自然面をもつが使用痕跡はない。大形川原石を割り出している様子が看取できる。石材Bは安山岩の川原石で、5面の自然面のうち1面のみが凹凸がなく荒砥として使用された可能性がある。石材Dは流紋岩の川原石で、石材Aと類似するが使用痕跡はない。

浅川、裾花扇状地遺跡群では、カマドに裾花凝灰岩に由来する流紋岩が用いられる。火に関係する石材と火の使用、鉢150にみられる焼成後穿孔や被熱した土器などから、古墳時代集落での儀礼行為の一端を垣間見ることができないだろうか。

4 小穴、第4土器集積、河川跡

小穴・SP 1～16 (図5)

SP 1～9は、調査区東側で検出された古墳時代の小穴群で、0.4kgの土器が出土 (SP 4が0.3kg) した。覆土は基本層序Ⅲ層黒褐色土を基調とする。SP10～16は調査区北西側で検出された小穴群である。覆土は基本層序Ⅱ層灰黄褐灰色土を基調とする。中世以降の小穴であり、SM3004、SB 2に関連したものではない。

第4土器集積 (図5)

SB 1 検出時に、南東部1m付近の黒褐色土下層に0.6kgの土器片と焼土の集積が明らかとなった。土器・焼土の範囲は径40cmほどの範囲で、土器を取り上げた後に精査を行ったがピット等は明らかでない。焼土とともに土器片は被熱しており、そのあり方は、SDZ 1 溝上層で確認された第1土器集積に類似する。

河川跡・SD 1 (図5、21)

調査区南側で検出された河川跡である。遺構検出時に、基本層序Ⅲ層黒褐色土下層を剥ぎ精査したところ明らかとなった。調査区西壁の断面観察では、攪乱土を含むⅡ層からの掘り込みは認められないから、落ち込みは基本層序Ⅲ層内にあると思われる。トレンチ調査のみを行い、全面掘り下げは実施していない。

河川跡は北辺を確認したのみで、大半は調査区南側に広がっている。方向はE-6°-Sで東西方向を示し、長さ19mを確認した。溝幅は最大2m、深さ70cmまで確認したが全体の規模は明らかではない。覆土は水平気味にレンズ状堆積を示す。各トレンチでの観察ではシルト質層と砂質層が互層となり、砂質層には円礫が含まれ、水が流れた様相を示している。出土した土器は0.4kgで、破片が数点出土したにすぎない。古墳時代中期の壺、高杯、杯片が認められ、すべて古墳時代の土器破片と思われる。古代以降の須恵器片や陶磁器片の出土はない。

県高田若槻線地点の発掘調査で明らかとなった溝の方向が、扇状地地形の傾斜方向である北西から南東方向に向くことに対して、SD 1は東西方向を示している。これは、自然の流路というよりも人為的な流路が想起されるところである。SD 1の2～3m南側には現鐘鋳堰が西から東へと流れており、鐘鋳堰開壜をめぐる情報を内包する可能性もある。

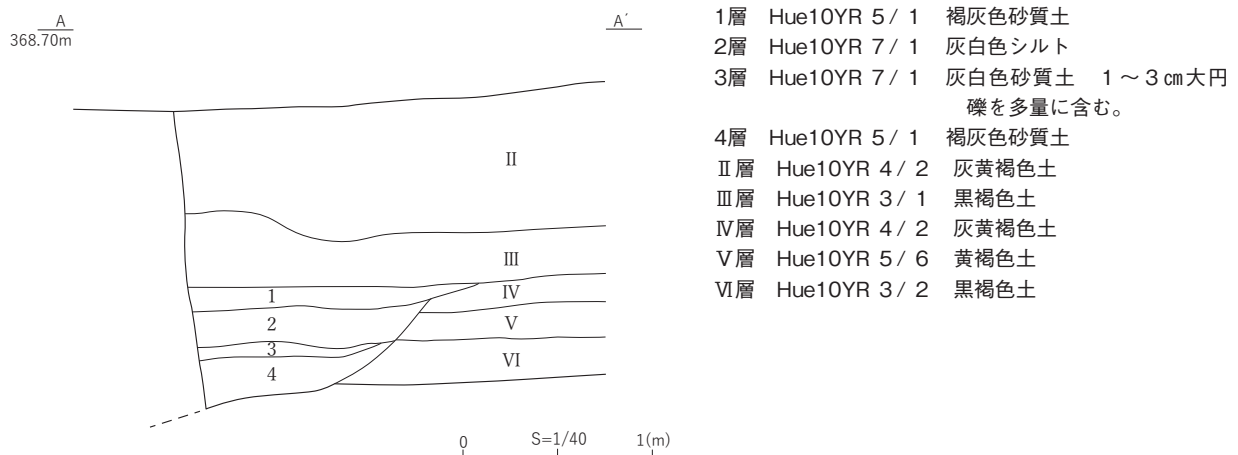


図14 河川跡・SD1土層断面実測図

第3節 遺物

発掘調査の結果、12基の遺構および土器集積から総重量27.6kgにおよぶ土器片が出土した。須恵器、古代の土師器は出土していない。遺物は種類ごとに分類した後、できるかぎり復元実測を行うことにした。168点について図化を実施し、実測図には通して番号を付すとともに、基礎データを観察表（表2）にまとめた。

1 竪穴建物跡出土土器

第1号竪穴建物跡・SB 1出土土器（図15～17 1～67）

土器破片11kgが出土し67点を図化した。遺物は遺構を4分割して取上げた。カマドに向かって左から時計回りにA～D区とした。床面出土11点、カマド内出土3点など主な遺物は、図6に出土位置を図示した。

1～16、18～25が杯、17、66、67が鉢、30～34が蓋、26～29、35～49が高杯、50～52が壺、56が土器転用円盤、57～65が甕である。なお、明らかに異なる時期の遺物もSB 1覆土内出土として掲載している。53は箱清水式、54、55は古墳時代前期、65～67は古墳時代後期に比定される。

杯は24点を図示し、SB 1提示土器の36%を占める。内面に黒色処理を施す個体は3点で、杯の13%である。口縁部の形状から4種類に分類した。A類：口縁部が内彎ぎみに立ち上がり、口縁端部を丸める。SB 1では高杯杯部に認められる（27）。B類：口縁端部を内側につまみ、内面に斜位面を形成し、外側に短く外反させる。いわゆる内斜口縁系杯（1～8、19～23）。内斜面の稜が明瞭なもの・B 1（1）と、内斜面の稜が不明瞭なもの・B 2（6）がある。C類：口縁端部に強いヨコナデを施し、口縁端部が幅広に外反する。B類に比べて外反部が長い（9～12）。D類：碗状の胴部上位で明瞭な稜をもち、口縁部が直に近い形状で立ち上がるいわゆる須恵器摸倣杯（15、16）。低脚高杯の杯部にも認められる（26）。胴部の形状は、半月状を呈し、内斜口縁部が短く外反するもの（1～5）、胴部上位の最大径からやや内彎し、球胴傾向を示してから頸部から口縁部が短く外反するもの（10～12）がある。杯の調整は、ハケで1次調整を行い、ミガキで2次調整を行う。ミガキを密に施すことにより1次調整を消しているミガキを精製ミガキと呼ぶ。内斜口縁B 1類は精製品が多い（1～3）。外面の1次調整は、口縁部を縦ハケ、底部丸底を横ハケあるいは軽いケズリで調整するが、粗いミガキにより1次調整痕が残るものもある（5～7、14）。ミガキは外面と内面では、外面に粗いミガキが、内面には丁寧なミガキがかけられることが多い。特殊例として、9は、底部外面に×印の焼成前線刻があり、胴部下半部に楕円形焼成後穿孔が穿たれ、その外面周囲には剥離面が確認できる。

鉢は杯に近い形状の17と、甕に近い形状の66、67に分類する。17は口径：器高=3：2程度で、杯に比べ器高の比率が高い。17の胴部下半には、杯9と同様な楕円形焼成後穿孔が認められ、外面周囲には剥離面も確認できる。A区覆土内出土の66、67は古墳時代後期と想定している。口縁部にヨコナデを施し、短い口縁部をもつ。外面はナデ、ケズリ調整で、67はケズリ調整の後、粗いミガキを施す。内面は精製横ミガキを施している。

高杯は低脚で小形サイズの26～29と、通常サイズの35～49があり、杯や脚の形状から3分類する。A類（26～29）は低脚小形サイズの高杯で、杯にハの字に広がる脚が付く。B類（35、41～45）は古墳時代前期の屈折脚高杯の系譜上にあり、柱状脚部が裾で強く屈折し外反する（35、41）。C類（46～49）はハの字に広がる脚にB類と同様な杯部が付く。脚部裾端部に面取りを施すものがある（47～49）。C類の脚部は須恵器の影響を読み取ることができよう。高杯B、Cは、口縁部が逆ハの字状に立ち上がる形状をなす。杯部内面は平坦である。杯部と脚部の接合技法は、中空の脚に杯底部を付着させ、両者の接合を補強するため粘土棒を杯部から脚部に充填する。脚部内面に飛び出した粘土棒は、脚内面にそのままにするもの（37）、脚内面に指で伸ばしてなでつ

ける(35・36)ものがある。杯部底部外面は、脚から放射状にハケ調整をしてからミガキをかける。蓋は天井部に円形つまみが付く(30、31)。天井部は平坦ぎみで、口縁部が直立気味、あるいは弱く外反する。

壺は小形の精製壺(50)、大形のミガキ・ナデ系の壺(51、52)がある。51は球胴で頸部が締まる壺で、口縁部は広口あるいは有段を呈するものと思われる。口縁部形態から有段系の壺A類(75)、外反系の壺B類(77)に分類される。外面はハケ調整後ミガキ手法を施す精製壺である。成形は、底部を横ハケ調整しながら一次成形を行い、一定時間の経過後、二次成形で胴部を立ち上げている。二次成形内面は軽い横ケズリを施している。52は外面ナデ調整、胴下半部内面に二次成形の痕跡が認められる。

甕は外面ナデ調整(57)とハケ調整(60)とがある。底面は62～64が平底、60、61が丸底である。60の胴部下半内面には、壺51、52に認められた二段階成形の接合痕跡が認められ、胴下半部二段階成形技法で製作されている。甕65は、D区覆土上層から出土した。成形、調整技法は、口縁部を強くヨコナデを施した後、胴部外面は上から下方向にケズリを施し、内面上部は横ハケ調整を施している。その形状から、古墳時代後期の遺物と考えられる。2次的な被熱痕跡があり、明橙褐色を呈す。出土位置には、SB1を掘り込むピット等の掘り込みがあったと想定されるが、SB1検出時には明らかになっていない。第3土器集中・土器152に形状、調整が類似する。

土製円盤56は、1/2を欠損する。甕胴部破片(外面ハケ、内面ナデ調整)を転用し、残存部では断面を5か所磨って成形している。中心の穿孔は認められない。

第2号竪穴建物跡・SB2出土土器(図17、18 68～92)

土器破片8.4kgが出土し25点を図化した。68～72が杯、73、74が高杯、75～79が壺、80～92が甕である。

杯68、69は、口縁部が内彎する杯A類である。68は器壁が非常に薄く、内外面ミガキ手法の精製土器で、口唇端部を内斜状に面取りを行う。69は外面下半部に横ケズリを施し粗くミガキをかける。内面は外面に比べ丁寧なミガキを施す。70は杯B類である。72は杯C類、71は胴部に対して口縁部が大きく外反し、E類とする。

高杯73はC類である。脚部は端部にヨコナデを施し、短く外反する。脚と杯底面の接合は粘土棒を充填する。

壺は大形サイズと、中・小形サイズとに分かれる。75は有段口縁壺A類で、口縁部をヨコナデにより有段部をシャープに仕上げている。口唇部は面取りをする。77、78は壺B類の広口壺である。77は精製土器で、焼き上げは白色系を呈し、褐色系の当遺跡の土器胎土と異なる。79は小型壺で、球胴に直口縁が付くと思われる。

甕は、カマド内に埋置され一括性が高い。甕84～87は、胴部最大径を胴中位にとり卵形を呈し、86は丸底を呈する。85、86、87は、胴下半部が二段階成形技法で製作されている。胴部調整は、縦ハケ調整(85～87)、あるいはナデ調整(84)を行い、最後に口縁部を強くヨコナデを施して仕上げている。内面調整にはケズリが多用される。86では、一段階成形で同心円状の横ハケ調整を施し、二段階成形で左上がり方向のケズリを行っている。

第3号竪穴建物跡・SB3出土土器(図18、19 93～103)

土器破片1.3kgが出土し11点を図化した。P1から94、北東隅の床下から93が出土したほかは覆土内から出土した。遺物は少ない。93～98が杯、99、100が甕、101が高杯、102、103が甗である。

杯は、93、94が杯C類で、口縁端部が幅広に外反する。94は内面に黒色処理を施す精製土器である。95、96は杯A類で、96は外部底面にヘラケズリを施す。97、98は須恵器摸倣杯の杯D類である。

甕99の口縁部は、ヨコナデを施した後、口縁部内側を端部下面から内面のみヨコナデを施し、口縁端部内側に肥厚部を作り出している。甗103はやや小形のサイズである。胴部に牛角状の把手が付くと思われるが、今回の調査で牛角状把手は出土していない。外面にケズリ調整、内面にナデ調整が行われる。高杯101は、ハの字脚。高杯C類の脚部である。2次的な被熱を受けた被熱土器のため、調整は不明瞭である。

2 掘立柱建物跡、周溝墓、土器集積、小穴、河川跡、検出面出土土器

第1号掘立柱建物跡・ST1出土土器(図19 104～114)

柱穴掘り方内より出土した土器片総点数および重量は表1に示した。そのうち、細片10点(104～113)と接合資料1点(114)を図示した。出土位置はP2(104)、P5(106・111・112)、P6(105、107、108)、P9(113)、P11(110、114)、P12(109)である。P11はSB1カマド周辺を掘り込んでいるため、114は、SB1の土器が混入したものとする。104、105は櫛描波状文を施文する。106～112は古墳時代の甕で、107～110はハケ調整甕で古墳時代中期の甕である。106は縦ケズリの甕で古墳時代後期以降の可能性はある。113はA類の高杯脚。掘立柱建物の掘り方内出土土器は、古墳時代中期の破片資料が主体であるが、106のケズリ甕から、古墳時代後期新相の破片が混入する時期が最新であると考えておきたい。

周溝墓3004・SM3004出土土器および関連資料(図19 115～120)

今回の北東、南東辺周溝の調査では、土器細片21片0.6kgが周溝内中層より出土したにすぎない。115～117、119が北東周溝コーナー付近から、118は南東周溝中央部より出土した。120は調査区北側で出土した遺構外の破片である。関連資料として提示する。

115は球胴の小型壺。ハケ調整で赤色塗彩を施す。頸部擬口縁が斜位を示すことから、口縁部は直立タイプの二重口縁壺ではなく、広口壺、直口壺と思われる。類似する壺が県埋文センター調査区SM3001に認められる。117は在来の橙褐色胎土の甕頸部破片である。頸部屈曲点から肩部に右下がりのハケを施した後、頸部に平行して2条の直線文を施すことからS字状口縁台付甕と想定したい。頸部内面には横ハケが観察されることから広義のB類としておきたい。119は台付甕脚部である。脚部と底部の接合技法が箱清水系の小型台付甕の技法と異なり、S字状口縁台付甕に近いが、調整手法はS字状口縁台付甕とは異なる。116、118はハケ調整くの字口縁甕である。116は内面調整にケズリは認められないが器壁が薄く薄甕傾向である。口縁部外面にヨコナデを施した後、肩部に縦ハケを施す。118は口縁部内外面に横ハケを施し、内面は粗くミガキを施している。

120は調査区出土資料である。壺115と同タイプの小型壺で、肩部に凸帯をもち、凸帯より下半が赤彩される。形状は凸帯が頸部屈曲点とはならない。凸帯に斜位の刺突列点文が施される。肩部の凸帯の形状および位置から類例を求めると、松本市弘法山古墳、中野市高遠山古墳墳頂部の土器群に認めることができる。

周溝墓SDZ1内土器集積出土土器(図20、21 121～152)

<第1土器集積土器群>(図20 121～137) 破片総重量0.5kg 古墳時代中期後半

P3上層に位置する。溝が埋没する過程で掘り込まれたピット内に遺棄されたと考えられる。121～126が杯、127、128が蓋、129～132が高杯、133が壺、134が鉢、135が甕、136、137が甑である。

杯類は、B1類(121～123)、B2類(124～125)が主体であるが、内斜面が長くC類に近い。高杯は小形の高杯A類(129)と通常サイズの高杯B類(130～132)とがある。130は杯部のみ完存し、焼土粒に覆われて伏せた状態で出土した(写真23)。129はその脇から、131、132はその下から出土した。129は杯部が黒色処理される。第2土器集積の杯140と同じ杯部の形状とみられる。脚部は、端部をつまみ上げ状にヨコナデを施し面取りを行う。脚部外面に精製縦ミガキを施し、ヘラ描き沈線で基準線を描いてから2段の長方形透かし孔を4か所穿っている。同様な須恵器高杯が坂城町青木下遺跡にみられる。

<第2土器集積土器群>(図20 P1・138～142、P2・143～146) 破片総重量1.6kg 古墳時代中期後半

P1から出土した資料138～142と、P2から出土した資料143～146を第2土器集積とした。若干の焼土粒を伴う。いずれも古墳時代中期後半の土器である。

杯138はB1類。139、140はD類で、いわゆる須恵器模倣杯である。SB1-26・27のように脚がついて須恵器

摸倣高杯となる可能性もある。壺142は、SB 1 - 壺51に胎土および調整が類似し、同一個体の可能性もある。144は外面ミガキ、内面ナデの中形の壺で、直口縁を想定している。丸底の外面に径1cmほどの、内面に径2cmほどの窪みが認められる。

＜第3土器集積土器群＞（図13、21 147～152、） 破片総重量2kg 古墳時代後期後半

SDZ 1周溝を掘り込んだP 4から出土した一括性の高い土器群で、完形に近い土器が礫とともに出土した（図13、21、写真24）。小形で外面にケズリ調整を多用する。147、148は杯、149は甑、150、151は鉢、152は甕である。杯147、148はやや上層で出土した。丸底を呈し、口縁部が内彎気味に立ち上がる。杯A類に類似するが、器壁が厚く異なる類型である。外面は横ケズリを施し粗いミガキを行い、内面はミガキ手法によって黒色処理を行う。149は小形の甑で、把手はつかない。外面は上から下に向かってケズリ調整を行う。内面は横ハケ調整後縦ミガキを施すが、輪積み痕が残る箇所も認められる。口径サイズから、甕152とセットで使用されたことが窺える。鉢150、151は外面にケズリ調整、内面にミガキ調整を施す。150の肩部には焼成後穿孔が認められる。甕152は、直立的に立ち上がる胴部に口縁が短く外反する長胴甕である。外面は上から下に向かって縦ケズリを行い、胴下半部には粗くミガキをかける。内面は縦ハケ調整を施すが、輪積み痕跡は消えていない。形状、調整手法はSB 1 - 甕65に類似する。152は薄紫色に2次的な被熱を受けている。周囲から焼土粒も出土した。

第4土器集積、小穴・SP 4、河川跡・SD 1、検出面出土土器（図21 153～167）

出土位置とその構成は、第4土器集積（153、154）、小穴・SP 4（155～159）、SP 3（160）、河川跡・SD 1（161～163）、検出面（164～167）である。第4土器集積は、破片総重量0.6kg。第1土器集積と同様に焼土粒がブロック状に集積し、被熱土器が認められた。甕153、杯154は橙褐色に2次被熱していた。SP 4は、破片総重量0.3kg。第4土器集積に近い小穴で、甕159は、橙褐色に2次被熱被熱している。155が杯C類、156はC類の口縁部が大きく伸びて外反するタイプで、杯E類とする。後期型の杯である。

SD 1は自然流路の上層であるが、基本層序Ⅲ層下で、出土土器は細片で破片総重量0.4kg。いずれも古墳時代の土器片の可能性が高い。161は古墳時代中期の杯、162は上げ底状の底部で底面の内外面にはケズリを施す壺である。甕163口縁部はヨコナデを施す。遺構外検出面には、古墳時代杯（164、165）、上げ底のハケ調整壺（166）、かわらけ（167）がある。

3 石製品（図21 168）

SB 2P 2覆土内出土砥石を図示した。168は流紋岩製の砥石。石目が比較的細かいことから中砥もしくは仕上砥と思われる。4面を使用し、研ぎの方向は縦である。擦痕の他に細かい溝も認められ、金属器の歯がたって生じた可能性が高い。

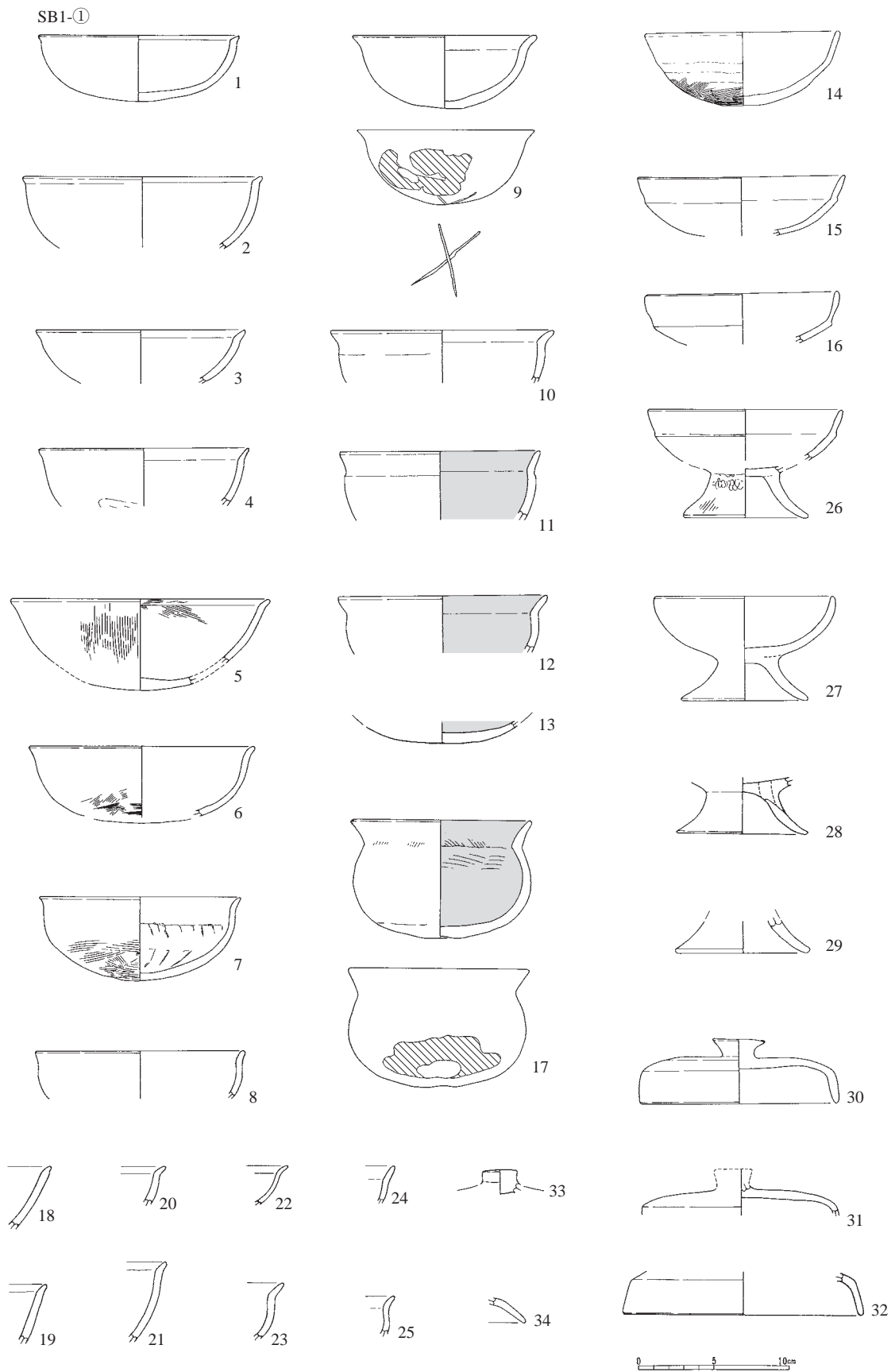


图15 土器实测图1 (SB1-①)

SB1-②

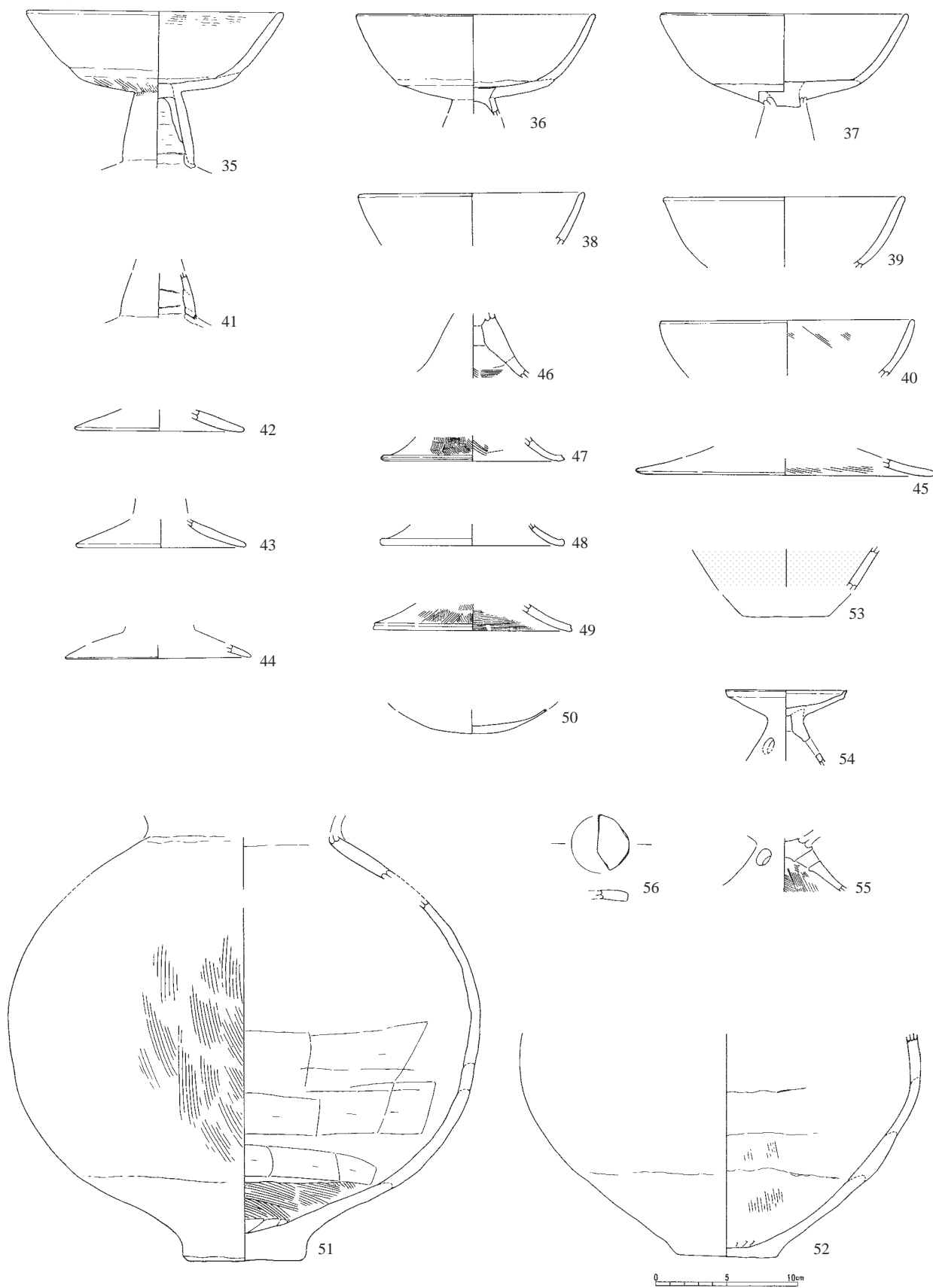


图16 土器实测图2 (SB1-②)

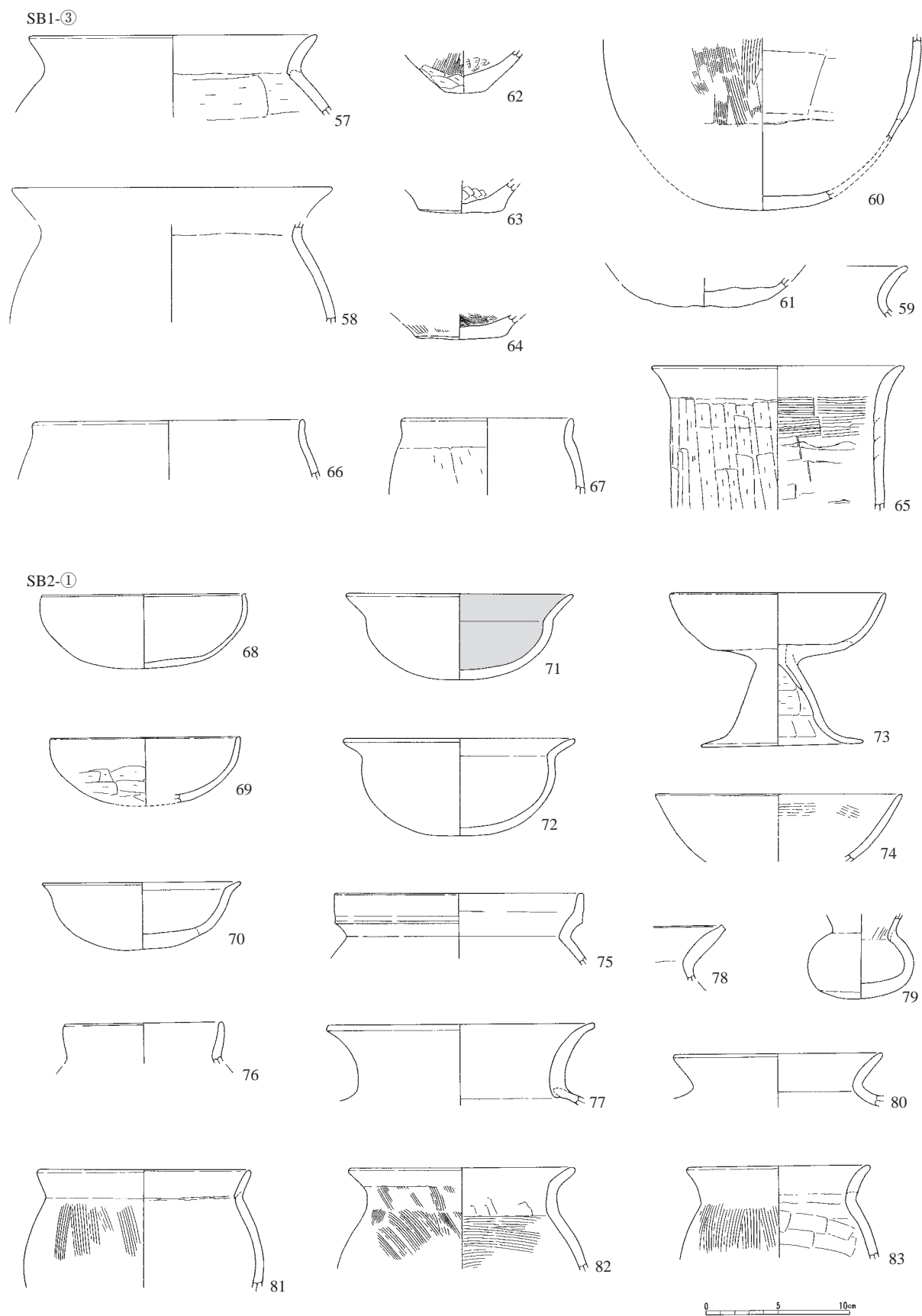


图17 土器实测图3 (SB1-③、SB2-①)

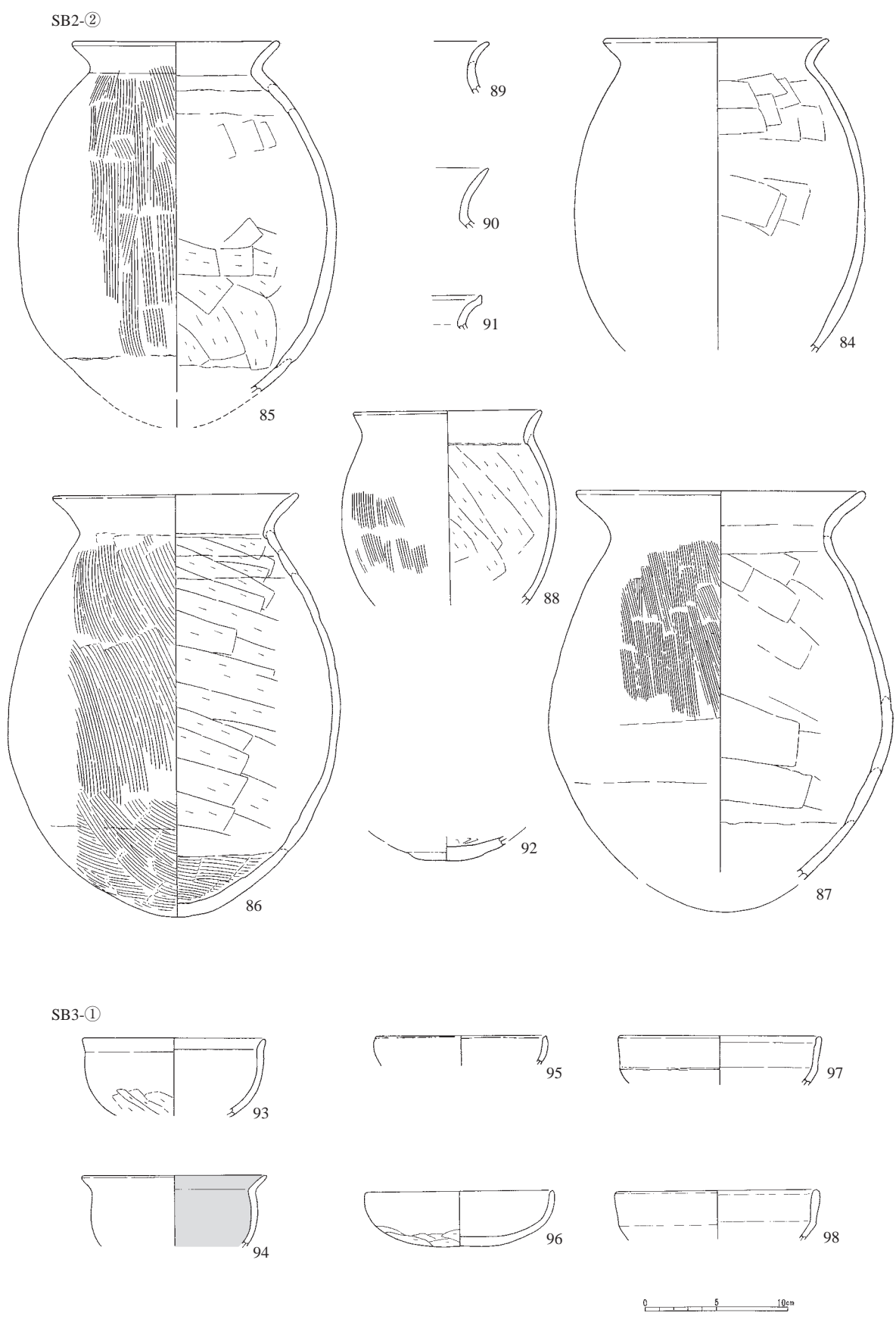
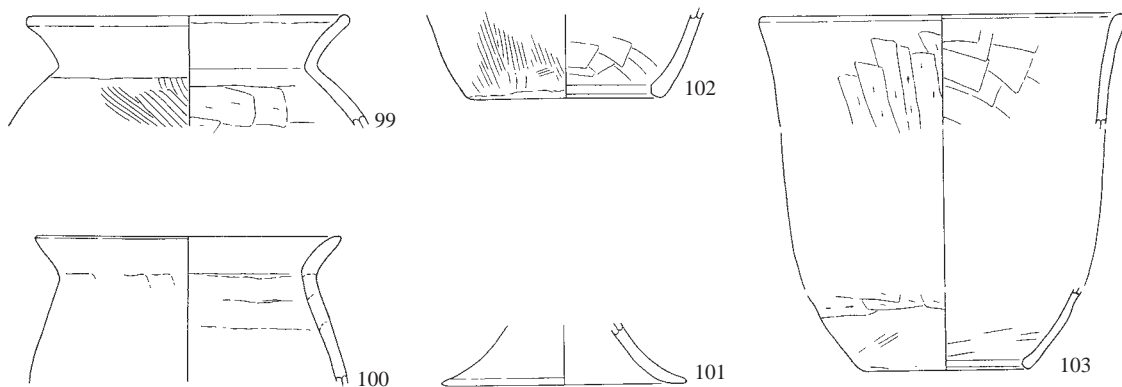
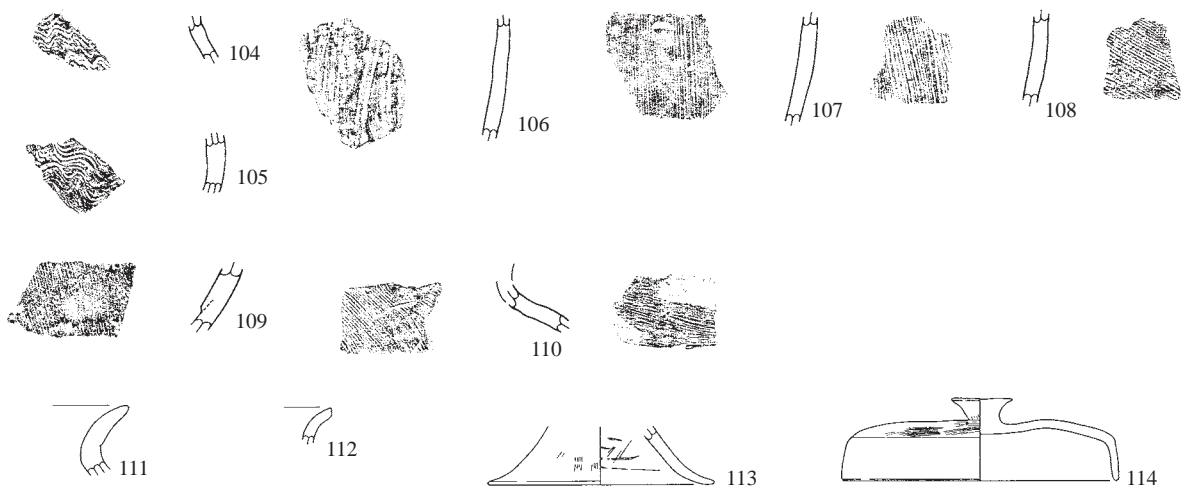


图18 土器实测图4 (SB2-②、SB3-①)

SB3-②



ST1



SM3004

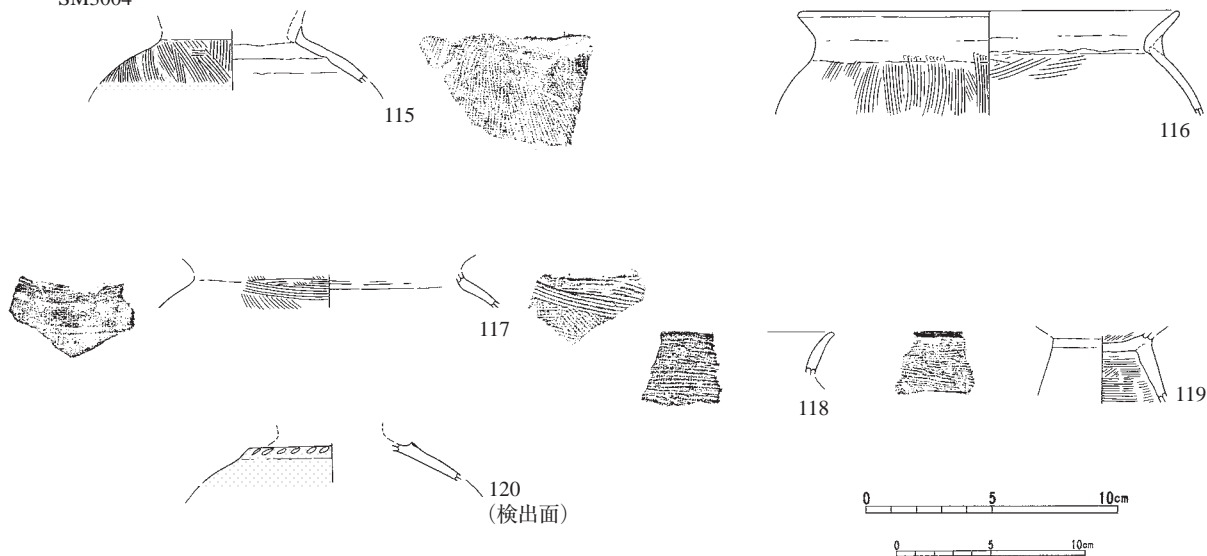
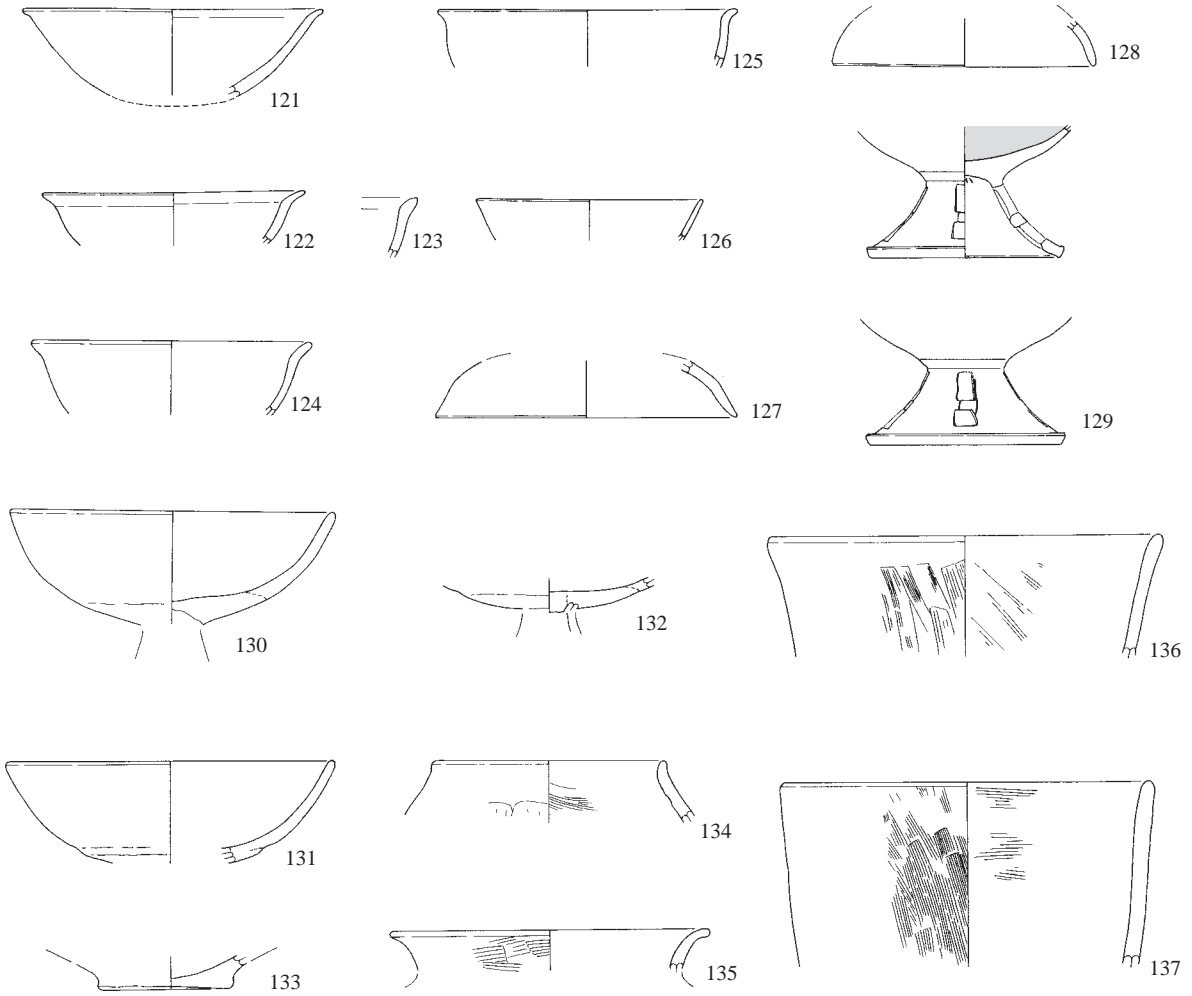


图19 土器実測图5 (SB3-②、ST1、SM3004、検出面)

第1土器集積



第2土器集積(P1 138~142 P2 143~146)

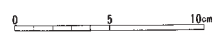
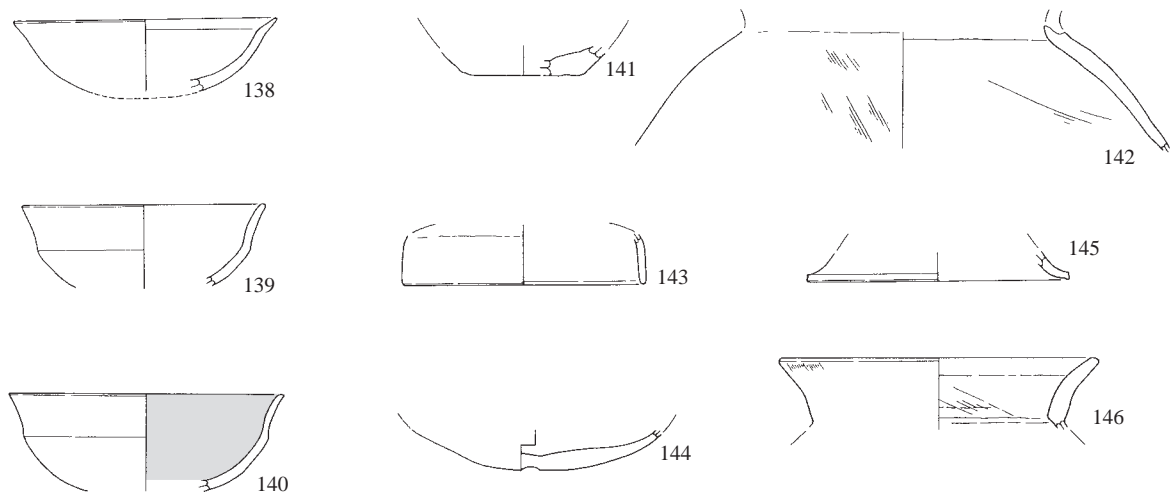
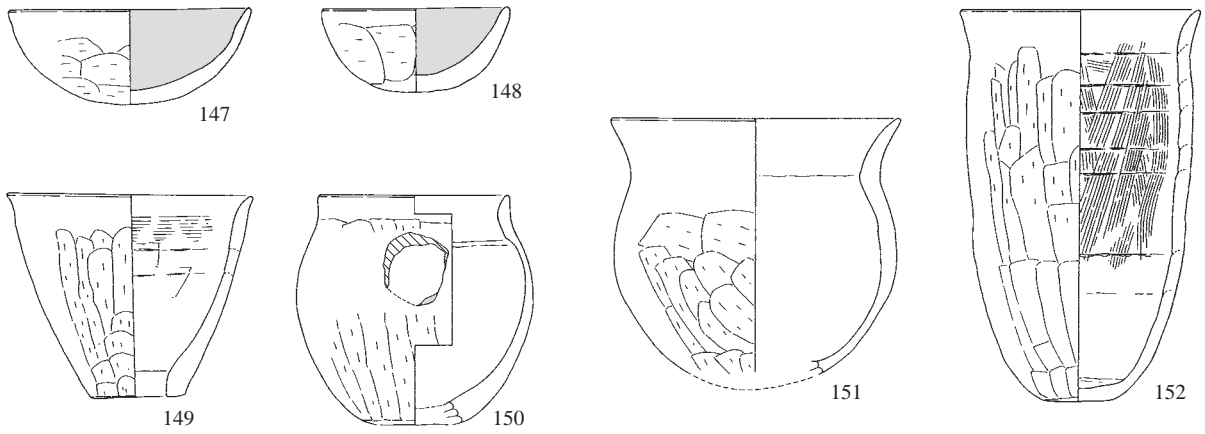
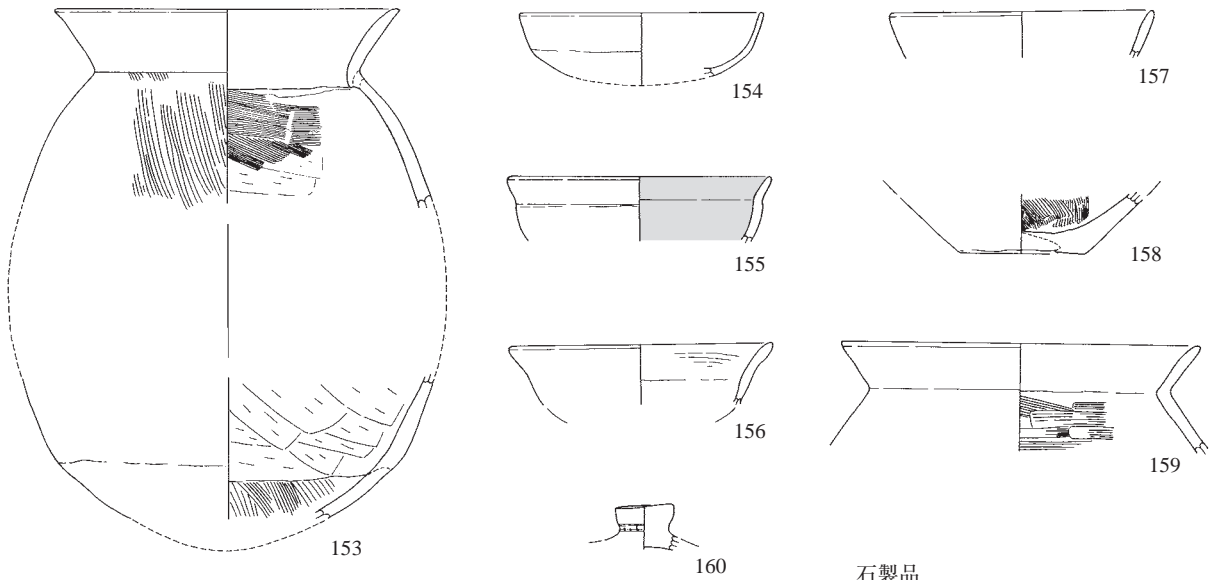


図20 土器実測図6 (第1土器集積、第2土器集積)

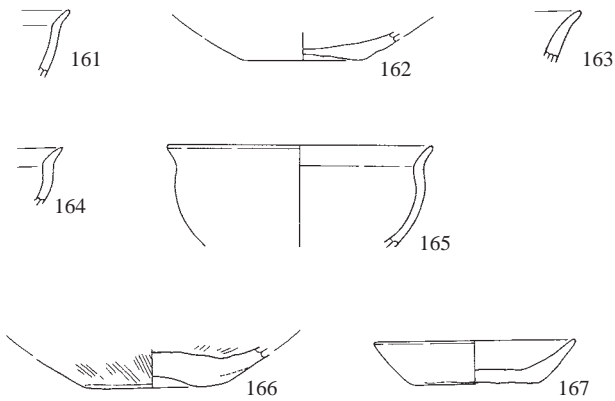
第3土器集積



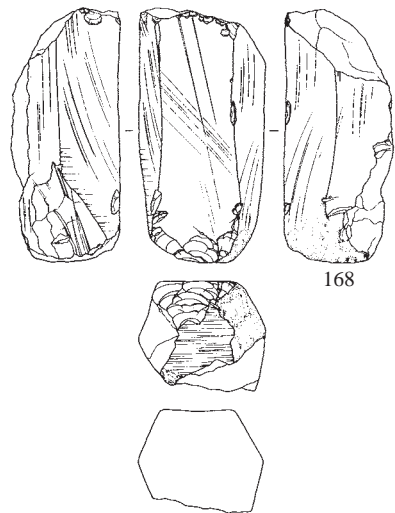
第4土器集積(153、154)、小穴(155~160)



河川跡(161~163)、検出面(164~167)



石製品



0 5 10cm

図21 土器実測図7(第3土器集積、第4土器集積、小穴、河川跡、検出面) 石製品実測図

表2 遺物観察表(1)

報告No	遺構名	出土位置	層位	遺存	器種	口径	器高	外 面	内 面
1	S B 1	D区	下層	1/2	杯	13.4	4.5	横ミガキ 底部:ケズリ→ミガキ	精製縦ミガキ 内斜口縁明瞭
2		A区	覆土	1/2	杯	16		精製ミガキ 一次調整確認されず	斜め右上がり精製ミガキ
3		C区	覆土	1/4	杯	14		口:横ナデ 胴:縦ミガキ	精製縦ミガキ
4		A区	覆土	1/8	杯	14		縦ミガキ 底:横ケズリ→ミガキ	精製縦ミガキ
5		P 1	覆土	1/6	杯	17.2	6.2	口:縦ハケ→横ナデ→ミガキ 胴:縦ハケ→ミガキ 底:軽いケズリ→ナデ	口:横ハケ→横ナデ→ミガキ 胴:左上がりハケ→放射状縦ミガキ 底:線刻
6		P 3	覆土	1/4	杯	14.8		口:横ナデ 胴:横ハケ→縦ミガキ	左上がりミガキ 右上がりミガキ
7		D区	下層	1/1	杯	13.4	5.6	口:横ナデ 胴:上・縦ミガキ 下・一方ハケ→粗い縦ミガキ	口:横ナデ 稜不明瞭 胴:横ハケ→ミガキ
8		BDべ	覆土	1/12	杯	14		口:横ナデ 胴:ミガキ	ミガキ
9		図6	覆土	完	杯	11.2	5	上:ハケ→横ナデ→粗い横ミガキ 底:一方ハケ→粗いミガキ 底部に線刻	同心円状横ハケ→横ミガキ 内面より焼成後穿孔
10		C区	床面	1/8	杯	15		口:横ナデ 胴:横ミガキ	精製ミガキ
11		C区	床面	1/8	杯	13.4		口:横ナデ→横ミガキ 胴:横ミガキ	黒色処理 口:横ナデ→横ミガキ 胴:縦ミガキ
12		B区	覆土	1/8	杯	14		口:横ナデ→横ミガキ 胴:縦ミガキ	黒色処理 ミガキ
13			検出	1/2	杯			底:精製ミガキ	黒色処理 一方ミガキ
14		図6	床面	3/4	杯	13.2	5	横ナデ→粗いミガキ 底:ヨコハケ	胴:左上がり精製縦ミガキ 底:回転ハケ→ミガキ
15		D区	上層	1/4	杯	14		口:横ナデ→縦ミガキ 胴:縦ミガキ(精製ミガキが明瞭)	精製ミガキ
16		D区	下層	1/6	杯	11.8		精製縦ミガキ	精製縦ミガキ
17		図6	覆土	完	鉢	12	7.8	口:横ナデ→横ミガキ 胴:縦ハケ→横ミガキ 底:軽い横ケズリ 径2cm平底 外面:穿孔部付近被熱	黒色処理 口:ハケ→横ナデ→横ミガキ 胴:横ハケ→放射状縦ミガキ 内面より焼成後穿孔
18		A区	覆土	1/10	杯			縦ミガキ	縦ミガキ
19		D区	上層	細片	杯			縦ハケ→ミガキ ハケ痕有	横ハケ→ミガキ 稜明瞭
20			床面	1/6	杯			ミガキ	ミガキ
21		D区	上層	細片	杯			縦ハケ→ミガキ	ミガキ(精製) 稜明瞭
22		南北べ	覆土	細片	杯			口:横ナデ 胴:ミガキ	ミガキ
23		D区	上層	細片	杯			口:横ナデ 胴:縦ミガキ	横ミガキ(精製) 稜不明瞭
24		D区	覆土	細片	杯			精製ミガキ	精製ミガキ
25		D区	覆土	細片	杯			口:横ナデ 胴:横ケズリ→ミガキ	ミガキ 稜不明瞭
26		図6	覆土	1/6 1/1	高杯	13	7.2	杯:上・横ミガキ 下・縦ミガキ 脚:縦ハケ→縦ミガキ	杯:放射状縦ミガキ 脚:横ナデ
27		図6	床面	1/2	高杯	12	7	杯:縦ハケ→縦ミガキ 脚:縦ミガキ	杯:放射状精製縦ミガキ 脚:横ナデ
28		カマド	覆土	2/3	高杯			杯:縦ミガキ 脚:縦ミガキ	杯:放射状ミガキ 脚:横ナデ
29		D区	下層	1/4	高杯			横ナデ→ミガキ	横ナデ
30		図6	床面	完	蓋	13.3	4.4	つまみ:ナデ 天井:縦ハケ→粗い横ミガキ 天井~側面:回転ケズリ→粗いミガキ 外面被熱	天井:一方精製ミガキ 側面:横ミガキ 内面煤付着
31		図6	カマド	2/3	蓋	14		ミガキ	ミガキ
32	P 2	覆土	1/8	蓋	16		ミガキ	ミガキ	
33	南北べ	覆土	1/1	蓋			器面荒れ調整不明瞭	器面荒れ調整不明瞭	
34	D区	覆土	細片	蓋			精製ミガキ	精製ミガキ	
35	図6	カマド	完	高杯	17.8	11	杯:胴・精製縦ミガキ 底・放射状縦ハケ→粗いミガキ 脚:精製縦ミガキ	杯:胴・横ハケ→放射状縦ミガキ 底・放射状縦ハケ→粗いミガキ 脚:ケズリ	
36	A区	覆土	1/3	高杯	16.4		杯:胴・横ナデ→縦ミガキ 底・放射状ミガキ	横ナデ→縦ミガキ	
37	図6	床面	3/4	高杯	17.2		杯:胴・横ナデ→縦ミガキ 底・放射状縦ハケ→ミガキ	器面荒れ調整不明瞭なるも精製ミガキ	
38	A区	覆土	1/8	高杯	16		横ナデ→縦ミガキ	精製縦ミガキ	
39	A区	覆土	1/4	高杯	17		横ナデ→左上がりミガキ	横ナデ→横ハケ→縦ミガキ	
40	D区	覆土	1/8	高杯	18		縦ミガキ	左上がりハケ→縦ミガキ	
41	図6	上層	1/3	高杯			縦ミガキ	輪積み痕 ナデ	
42	BDべ	覆土	1/4	高杯			縦ミガキ	ナデ	
43	A区	覆土	1/4	高杯			横ナデ→縦ミガキ	横ハケ→横ナデ	
44	P 1	覆土	1/8	高杯			横ナデ→縦ミガキ	横ナデ	
45	BDべ	覆土	1/4	高杯			縦ミガキ	横ハケ→横ナデ	
46	BDべ	覆土	1/4	高杯			縦ミガキ	横ケズリ→横ハケ 杯部充填	
47	A区	覆土	1/8	高杯			縦ハケ 端部:横ナデ 面取り	ハケ→ナデ	
48	A区	覆土	1/8	高杯			器面荒れ調整不明瞭 端部面取り	器面荒れ調整不明瞭	
49	C区	下層	1/8	高杯			縦ハケ→ミガキ 端部面取り	横ハケ	
50	図6	覆土	2/3	壺			ハケ→ミガキ 丸底	ナデ	
51 b	図6	床面	1/2	壺			<51-b 頸部と51-a 胴部が接合>		
51 a	図6	床面	3/4	壺			縦ハケ→縦ミガキ	上:横ナデツケ 下:横ハケ	
52	図6	床面	1/1	壺			器面荒れ調整不明瞭 ナデ	上:ナデ 下:ハケ ケズリ→ナデ	
53	D区	下層	1/3	鉢			赤彩 ミガキ	赤彩 箱清水式鉢	
54	BDべ	覆土	2/3	小型器台			杯:精製ミガキ 脚:精製ミガキ 円孔3か所穿孔	杯:精製ミガキ 脚:ナデ <古墳時代前期>	
55	P 1	覆土	1/1	器台			縦ミガキ 円孔3か所穿孔	縦ハケ <古墳時代前期>	
56	C区	床面	1/2	円盤			甕胴部破片転用 ハケ (半分欠損)	ナデ	
57	A区	覆土	1/8	甕	20		口:横ナデ 胴:器面荒れるもナデ	胴:横ケズリ	

表2 遺物観察表(2)

報告No	遺構名	出土位置	層位	遺存	器種	口径	器高	外 面	内 面
58	S B 1		床面	1/4	甕			器面荒れるも ナデツケ→ナデ	ナデ
59			検出	細片	甕			口：横ナデ 胴：縦ハケ	口：横ナデ
60		図6	カマド	1/6	甕			縦ハケ・ナデ	上：横ナデツケ 下：ナデ
61		A区	覆土	1/8	甕			ケズリ→ナデ 丸底	ナデ
62		A区	覆土	1/8	甕			縦ハケ→底部周辺横ケズリ	底：回転ハケ→ナデ
63		A区	下層	2/3	甕			ハケ・ナデ 平底 底：ケズリ	底：回転ハケ 横ナデ
64		D区	下層	1/1	甕			ハケ 平底 底：ナデ	底：回転ハケ
65		図6	上層		甕	17.6		口：横ナデ→胴：縦ケズリ(上から下) 橙褐色に2次被熱	口：横ナデ 胴：上・横ハケ 下・横ナデツケ 輪積み痕
66		A区	覆土	1/8	鉢	18.4		縦ミガキ	横ミガキ
67		A区	覆土	1/8	鉢	12		口：横ナデ 胴：縦ケズリ→ミガキ	横ミガキ
68	S B 2	P 2	上層	1/3	杯	14	5.2	胴～底：精製横ミガキ	精製横ミガキ
69		P 2	上層	1/2	杯	13	4.8	口：横ナデ→ミガキ 胴：横ケズリ→ミガキ	縦精製ミガキ
70		カマドNo6		2/3	杯	13.6	4.7	口：横ナデ 胴：上・ナデ 底：ナデ	口・胴：横ナデ→縦ミガキ 底：ナデ→縦ミガキ
71			検出	1/3	杯	15.7	6	横ミガキ 底：一方向ミガキ	黒色処理 横ミガキ
72			検出	1/3	杯	15.8	6.8	器面荒れ調整不明瞭 被熱	器面荒れ調整不明瞭 被熱
73		カマドNo7		完	高杯	15	10.6	杯：縦ミガキ 脚：縦ミガキ	杯：縦ミガキ 脚：横ケズリ 脚端部：横ナデツケ
74		カマド		1/4	高杯	17		口：横ナデ 体：左上がりミガキ	口：横ナデ 体：右上ミガキ
75			検出	1/6	壺	17.2		口：横ナデ 体：ナデ	口：横ナデ 体：ナデ 口：面取り
76		P 2	上層	1/8	壺	10.8		器面荒れ調整不明瞭	横ミガキ
77		図7	床面	1/1	壺	18.4		横ナデ→縦ミガキ	横ナデ→横ミガキ
78	カマド周辺	覆土	細片	壺			口：横ナデ 口唇：摘み上げ状面取り	口：横ナデ	
79	図7	床面	1/1	小型壺			口：ナデ→ミガキ 胴：ナデ→ミガキ	口：ナデツケ→ミガキ 胴：ナデ	
80	カマド周辺	覆土	1/3	甕	14.4		口：横ナデ 胴：ナデか？	口：横ナデ	
81	P 2	上層	1/3	甕	14.6		口：横ナデ 胴：縦ハケ→ミガキ	口・胴：精製ミガキ	
82	P 2	上層	2/3	甕	15.8		口：ハケ→横ナデ 胴：縦ハケ	内：横ナデ 胴：横ハケ	
83	P 2カマド	上層覆土	1/2	甕	12.6		口：横ナデ 胴：縦ハケ	口：横ナデ 胴：横ナデツケ	
84	カマドNo6～8		2/3	甕	15.4		口：横ナデ 胴：軽い横ナデツケ→ナデ	口：横ナデ 胴：上・軽い横ナデツケ 胴：下・ナデ	
85	カマドNo1～3		1/3	甕	14.2		口：横ナデ 胴：上・縦ハケ 下・ナデ	口：横ナデ 胴：上・ナデ 下・ケズリナデ	
86	カマドNo5・7		2/3	甕	17	24.6	口：横ナデ 胴：上・縦ハケ 下・横ハケ	口：横ナデ 胴：上・左上がりハケ 下・横ハケ	
87	カマドNo6・8		1/3	甕	20		口：横ナデ 胴：上・縦ハケ 下・ナデ	口：横ナデ 胴：上・左上がりナデ ナデ下・ナデ	
88		検出	1/2	甕	13		口：横ナデ 胴：縦ハケ	口：横ナデ 胴：左ケズリ	
89		覆土	細片	甕			横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	
90	カマド		細片	甕			横ナデ	横ナデ	
91		覆土	細片	甕			横ナデ 口唇：摘み上げ状面取り	横ナデ	
92		覆土	1/3	甕			ナデ 丸底	横ハケ	
93	S B 3	北東隅	床下	1/6	杯	12.8		胴：ミガキ 底：ケズリ→ナデ	口：横ナデ 胴：ミガキ
94		P 1	覆土	1/4	杯	13		精製横ミガキ	横ミガキ 黒色処理
95			覆土	1/8	杯	12		ミガキ	ミガキ 口唇：内側に面取り
96			覆土	1/3	杯	13.2	3.9	胴：横ミガキ 底：ケズリ→ナデ	精製横ミガキ
97			覆土	1/12	杯	13.8		横ミガキ	横ミガキ
98			覆土	1/7	杯	14		横ミガキ	横ミガキ
99			覆土	1/12	甕	16.6		口：横ナデ 胴：縦ハケ	口：横ナデ 胴：横ケズリ
100			覆土	1/2	甕	16		胴：横ナデ 胴：ハケ→ナデ	口：横ナデ 胴：ナデ
101			覆土	1/2	高杯			器面荒れ調整不明瞭	器面荒れ調整不明瞭
102			覆土	3/5	甕	底10.4		縦ハケ→ナデ	ナデ
103		覆土	1/8	甕	19.4	19	ナデ→一部ヘラケズリ	ナデ	
104	S T 1	P 2	覆土	細片	甕			櫛描波状文(箱清水式系)	ミガキ
105		P 6	覆土	細片	甕			櫛描波状文(箱清水式系)	ミガキ
106		P 5	覆土	細片	甕			縦ケズリ	ナデ
107		P 6	覆土	細片	甕			縦ハケ	ナデ
108		P 6	覆土	細片	甕			縦ハケ	横ハケ
109		P 12	覆土	細片	甕			縦ハケ	ナデ 二段階成形接合面
110		P 11	覆土	細片	甕			縦ハケ 頸部擬口縁	横ハケ
111		P 5	覆土	細片	甕			横ナデ 端部外面面取り	横ナデ
112		P 5	覆土	細片	甕			横ナデ	横ナデ
113		P 9	覆土	1/6	高杯			縦ハケ→縦ミガキ	端：横ナデ 胴：横ハケ
114	P 11	覆土	2/3	蓋	14.2	4.4	口：横ナデ→ミガキ 天井：縦ハケ 横ハケ→ケズリ→ミガキ	口：横ナデ 天：ナデ	

表2 遺物観察表(3)

報告No	遺構名	出土位置	層位	遺存	器種	口径	器高	外 面	内 面
115	SM3004	A区	下層	細片	壺			ハケ→ナデ 赤色塗彩	頸部擬口縁 ナデ 輪積み痕
116		A区	下層	1/4	甕	19.8		口：横ナデ→胴：縦ハケ	口：横ナデ 胴：横ハケ→ナデ
117		A区	下層	細片	甕			右下がりハケ→頸部横ハケ2条	頸：横ハケ 胴：ナデ
118		C区	下層	細片	甕			口：横ハケ 胴：縦ハケ	口：横ハケ後粗いミガキ
119		A区	下層	1/3	甕			ナデ	内：ハケ 胴：横ハケ
120	調査区	北側	検出	1/8	壺			精製横ミガキ 隆帯以下赤彩 隆帯上：刺突列点文	ナデ
121	1土器集積		焼土	1/10	杯	16		口：横ナデ 胴：縦ミガキ	口：稜あまい 胴：右上ミガキ
122			覆土	1/11	杯	14		器面荒れるもミガキ	精製ミガキ
123			焼土	細片	杯			ミガキ	精製縦ミガキ
124			覆土	1/8	杯	15		口：横ナデ 胴：ミガキ	稜明瞭 精製ミガキ
125			覆土	1/6	杯	16		口：横ナデ 胴：横ミガキ	精製ミガキ
126			覆土	1/4	杯	11.8		器面荒れ調整不明瞭	器面荒れ調整不明瞭
127			覆土	1/12	蓋	16		横ナデ→ミガキ	精製ミガキ
128			覆土	1/12	蓋	13.8		横ナデ→ミガキ	精製ミガキ
129			焼土	2/3	高杯			脚：精製縦ミガキ 端部：ヨコナデ・面取り4か所二段透かし孔 杯：精製縦ミガキ	脚：ナデ 透かし孔・内側から削りとり 杯：黒色処理 精製ミガキ
130			焼土	1/1	高杯	17.4		横ナデ→縦ミガキ	横ナデ→精製右上がりミガキ
131			焼土	1/3	高杯	17.4		精製縦ミガキ	精製縦ミガキ
132			焼土	1/2	高杯			縦ハケ→ミガキ	ミガキ
133			覆土	1/1	壺			ハケ→ナデ	ハケ
134			焼土	1/12	鉢	12.2		口：横ナデ 胴：ケズリ	口：横ナデ 胴：横ハケ・ナデ
135			焼土	1/6	甕	11.8		口：横ハケ→横ナデ	口：横ナデ
136			焼土	1/12	甕		20.4	口：横ナデ→胴：縦ハケ	上：横ハケ 下：ナデ
137		焼土	1/8	甕	18.6		口：横ナデ→縦ハケ→ミガキ	左上がりハケ	
138	2土器集積	P1	覆土	1/4	杯	13.9		器面荒れ調整不明瞭	稜明瞭 精製ミガキ
139		P1	覆土	1/3	杯	12.7		縦ミガキ 口唇端部に面取り	縦ミガキ
140		P1	覆土	1/6	杯	14.3		口：横ミガキ 胴：縦ミガキ	黒色処理 精製縦ミガキ
141		P1	覆土	1/2	甕			胴：ナデ 底：ナデ	ケズリ
142		P1	覆土	細片	壺			右下がりハケ→精製ミガキ	ナデ 頸部：擬口縁
143		P2	覆土	1/4	蓋	12.7		器面荒れ調整不明瞭なるもナデ	器面荒れ調整不明瞭
144		P2	覆土	2/3	壺			器面荒れ調整不明瞭なるもミガキ	ナデ
145		P2	覆土	1/10	高杯			縦ハケ→ミガキ 端部面取り	
146	P2	覆土	1/6	甕	16.6		横ナデ	横ナデ→横ハケ	
147	3土器集積		検出	1/3	杯	12.6	5	口：横ナデ 胴：ケズリ→ミガキ	黒色処理 横ミガキ
148			検出	1/2	杯	9.8	4.4	口：横ナデ 胴：横ケズリ→ナデ	黒色処理 ミガキ
149		図12,13	覆土	1/1	甕	13	10.6	口：横ナデ 胴：縦ケズリ (上→下)	口：横ナデ 胴：上・横ハケ→ナデツケ 下・ナデツケ→縦ミガキ
150		図12,13	覆土	1/2	鉢	10	12.2	口：横ナデ 胴：縦ケズリ (上→下) →ミガキ 肩部：焼成後穿孔	口：横ナデ→精製ミガキ 胴：精製ミガキ
151		図12,13	覆土	2/3	鉢	15		口：横ナデ 胴：縦ケズリ (上→下)	口：横ナデ 胴：縦ミガキ
152		図12,13	覆土	2/3	甕	12.6	20.8	口：横ナデ 胴：縦ケズリ (上→下)	口：横ナデ 胴：上・縦ハケ 下・ナデ
153		4土器集積		覆土	1/2	甕	18		口：横ナデ 胴：縦ハケ
154			覆土	1/4	杯	12.8		横ナデ→ミガキ	横ナデ→ミガキ
155	S P 4		覆土	1/8	杯	13.8		口：横ナデ→ミガキ	黒色処理 精製ミガキ
156			覆土	1/8	杯	13.8		精製ミガキ	横ハケ→精製ミガキ
157			覆土	1/10	杯	13.8		精製ミガキ	精製ミガキ
158			覆土	1/2	甕			ナデ	縦ハケ
159		覆土	1/8	甕	19		口：横ナデ 胴：ナデ	口：横ナデ 胴：横ハケ	
160	S P 3		覆土	1/1	蓋			ナデ	ナデ
161	S D 1	A区	覆土	細片	杯			精製ミガキ	精製ミガキ
162		C区	覆土	1/2	壺			ナデツケ	軽いケズリ
163		C区	覆土	細片	甕			器面荒れ調整不明瞭	横ナデ
164	検出面		覆土	細片	杯			精製横ミガキ	精製横ミガキ
165		北東		1/4	杯			器面荒れ調整不明瞭	口：横ミガキ 胴：縦ミガキ
166				1/1	壺			縦ハケ 上げ底	縦ハケ 底面上げ底
167				1/2	皿			かわらけ：回転ナデ	回転ナデ



7



9



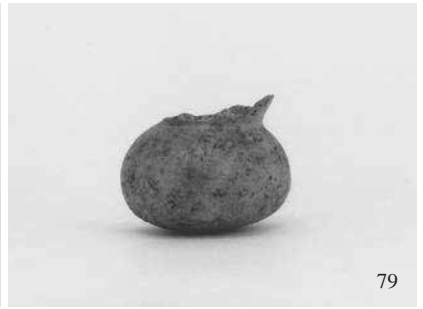
17



30



70



79



35



73



51



86

SB1 : 7、9、17、30、35、51 SB2 : 70、73、79、86

写真26 古墳時代中期土器



ST1 P11 : 114 第1土器集中 : 129、130 第3土器集中 : 149、150、152 SB1上層 : 65
写真27 古墳時代中期・後期土器

第4節 浸透柵施工工事に関わる工事立ち会い調査

起因本体工事の外構工事である浸透柵施工にあたり、掘削深度が遺構に影響を与えることが明らかとなったため、令和5年10月19日、浸透柵①調査区8㎡、浸透柵②調査区9㎡の工事立ち会い調査を行った。

浸透柵①調査区では、SM3004周溝墓の北東周溝部が検出された。市調査の北東周溝と同様に底面はフラットで遺物の出土はなかった。北東周溝は、南西周溝のように溝幅の膨らみが想定されたが、今回の調査で膨らまないことが判明した。膨らみをもつ南西周溝底面には、東海系供献土器が埋置され、この方向が周溝墓の正面観を示すものだろう。

浸透柵②調査区では、遺物破片の出土はなく、遺構も認められなかった。深さ1mで精査をしたところ、基本層序Ⅲ層黒褐色土が北東から南西に落ち込むラインが明らかとなり、掘削をしたところ、自然地形の変換と判断した。遺物の出土はない。

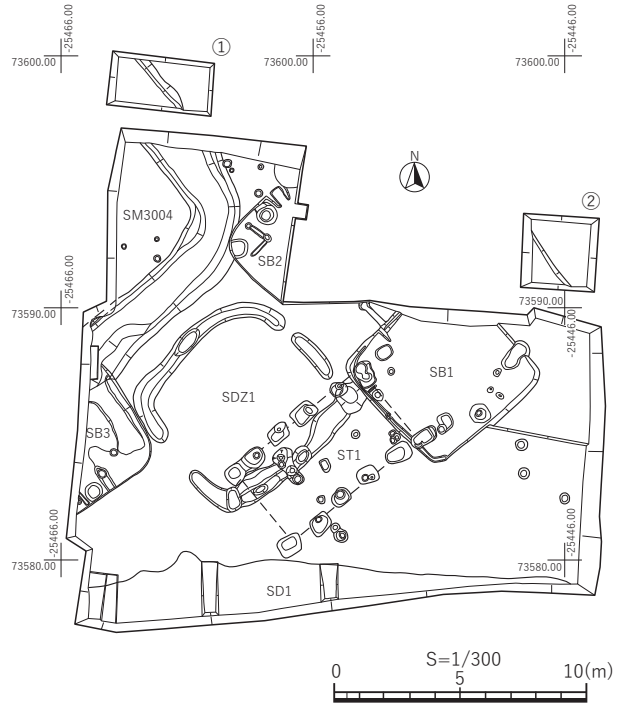


図22 浸透柵調査区①、②



写真28 浸透柵①調査区



写真29 浸透柵②調査区

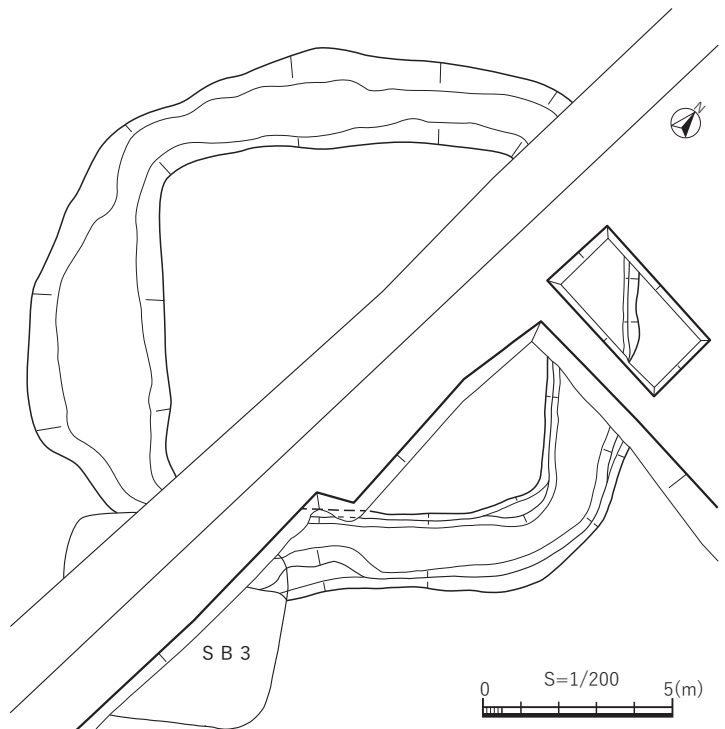


図23 周溝墓SM3004の復元

第4章 分析・まとめ

第1節 第2号竪穴建物跡・床直炭化材の樹種同定・放射性炭素年代測定結果

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

桐原牧野遺跡（長野県長野市桐原2丁目に所在）は、浅川の扇状地の扇央部に位置しており、これまでの発掘調査によって住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝などが検出され、古墳～平安時代の集落跡が確認されている（長野市教育委員会,2016）。平成26年度に実施された調査では、古墳時代の竪穴住居跡や地震の痕跡が確認されている。今回、桐原牧野遺跡から出土した炭化材について、樹種同定および年代測定を行い、炭化材の年代や樹種に関する情報を得る。

1.試料

試料は桐原牧野遺跡から出土した丸木状の炭化材1点である（No.1）。

2.分析方法

（1）樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

（2）放射性炭素年代測定

試料の表面に付着した泥などの不純物を削り落として50mgに調整する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1 mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge 3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1 mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、14Cの計数、13C濃度（13C/12C）、14C濃度（14C/12C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C 6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C 1）の測定も行う。δ 13Cは試料炭素の13C濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4（Bronk,2009）、較正曲線はIntCal20（Reimer et al.,2020）である。

3.結果

(1) 樹種同定

検出された種類はコナラ亜属コナラ節である。以下に検出された種類の木材解剖学的特徴等を述べる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Quercus subgen. Quercus sect. Prinus) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

(2) 放射性炭素年代測定

結果を表1、図1に示す。分析試料はいずれも保存状態が良く、年代測定に必要な炭素量が回収できている。同位体補正を行った年代値は、 1585 ± 20 BPである。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である 2σ の値は、calAD425～525を示す。

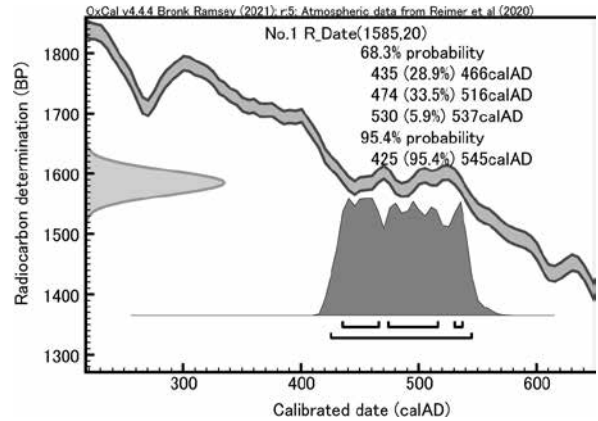


図1 暦年較正結果

表1. 放射性炭素年代測定結果

試料番号	性状	方法	補正年代 BP (暦年較正用)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代			Code No.		
					年代値		確率 %			
No.1	炭化材 コナラ亜属 コナラ節	AAA (1M)	1585 ± 20 (1585 ± 20)	-27.23 ± 0.16	σ	cal AD 435 - cal AD 466	1515 - 1485 calBP	28.9	YU-18419	pal-14793
						cal AD 474 - cal AD 516	1476 - 1434 calBP	33.5		
						cal AD 530 - cal AD 537	1420 - 1414 calBP	5.9		
					2σ	cal AD 425 - cal AD 545	1525 - 1406 calBP	95.4		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用
- 7) 較正データセットはIntCal20を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である

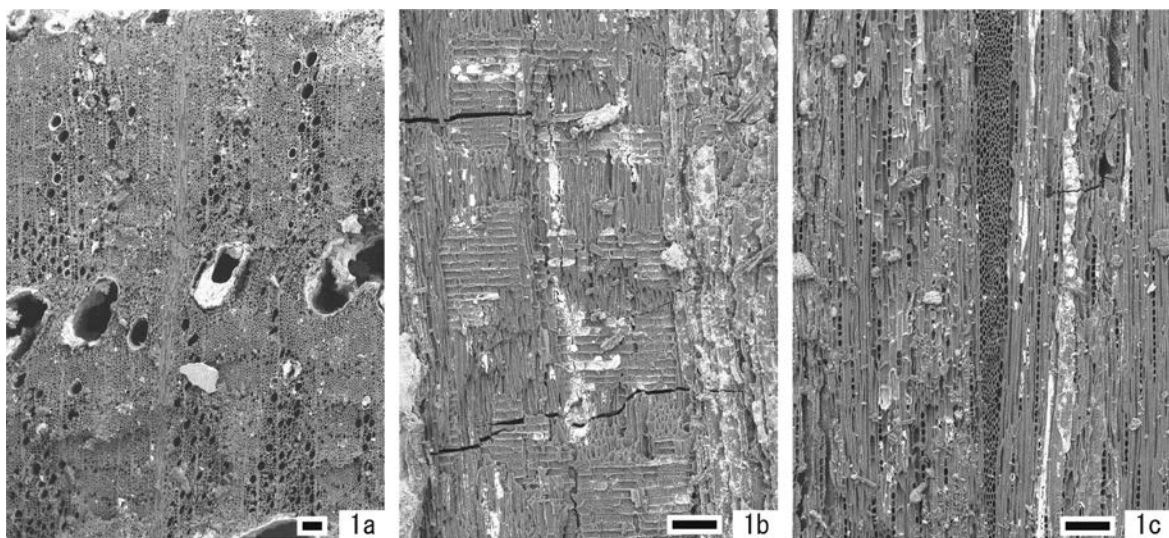
4.考察

丸木状の炭化材は、calAD425～525の年代値が得られ、5世紀～6世紀初頭の年代観を示した。本遺跡ではこれまでも古墳～平安時代の遺構が確認されており、調和的な結果と言える。本炭化材が採取された遺構もほぼ同時期であると考えられる。

また、ナラ材は、重硬で割裂しやすい特徴があるので、その特徴を生かしては床材や器具材として用いられる。また、火持ちが良く、火力も強いいため、薪炭材として有用である。コナラ節は、林縁、河川沿いなど明るい林地を好む種類で、人家近くにいわゆる「里山林」を構成する。里山林は、適度な伐採や粗朶の収奪などが行われることにより維持管理される森林で、萌芽による更新が容易な陽樹で構成される。これまでに実施された浅川扇状地遺跡群の調査においても弥生時代や古墳の住居跡や溝跡などから検出されている (長野県長野建設事務所・長野県埋蔵文化財センター, 2021)。今回出土した丸木状の炭化材も、遺構構築材等として利用されたものが、火災などの理由により炭化して出土したのと考えられる。

引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.
- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,449p.
- 長野県長野建設事務所・長野県埋蔵文化財センター,2021,長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書130 長野市 浅川扇状地遺跡群 社会資本整備総合交付金(街路)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - (都)高田若槻線 長野市 桐原～吉田(1) - 第2分冊,307p.
- 長野市教育委員会,2016,長野市の埋蔵文化財第143集 浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡 - 桐原一丁目分譲地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -,22p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP) . Radiocarbon, 62, 1-33.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .



1. コナラ亜属コナラ節 (No. 1)

a:木口 b:柁目 c:板目
スケールは100 μ m

図版1 炭化材

第2節 まとめ

1 周溝墓3004出土土器について

本発掘調査では、古墳時代前期の遺構として周溝墓2基が検出された。桐原牧野遺跡および周辺遺跡では、古墳時代前期の集落跡と墓域が検出されており、集落と墓の関連が注目される場所である。本項では、県高田若槻線地点と本調査地点で検出され、良好な一括資料が出土した周溝墓3004（SM3004）の出土遺物について、若干の考察を行いたい。

周溝墓3004の出土遺物は、本報告書第3章第2節3で示されているとおり、以下の3種類のまとまりに分けることができる。

- ① 周溝底部から出土し、廃棄時の状態を維持していると考えられるもの。（A群）
- ② 埋土から比較的大きな破片状で出土し、破碎後に廃棄されたと考えられるもの。（Ba群）
- ③ 埋土から出土した破片で、周辺からの流入の可能性が高いもの。（Bb群）

出土状況から、A群は墳墓に供献された土器群と推定され、Ba群は墳墓周辺で使用された儀礼行為に関わる土器群と推定される。二つの土器群は、器種構成や土器の様相に相違がみられる。

A群の器種は、壺、高杯、小型鉢、器台がある。壺は胴中位に最大径を持つ球胴形を呈し、ミガキ調整によって仕上げる。頸部から口縁が大きく外反する広口壺である。

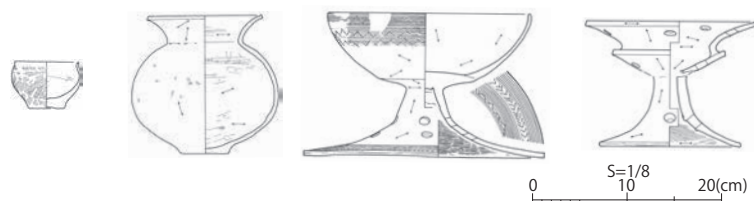
桐原牧野遺跡を含む千曲川流域では、弥生時代後期に櫛描文や赤彩を特徴とする箱清水式土器が隆盛する。しかし、A群には、弥生時代後期以降長く使用されてきた在来系土器である箱清水式土器の特徴は薄く、他地域で使用されてきた土器（外来系土器）の特徴が強い。器台の形態や壺の口縁部を面取りするといった技法の点から、北陸地方の影響が考えられる。また、高杯の施文から西濃地方の影響が指摘されており、西濃～北陸地方にかけてと桐原牧野集落との交流関係が窺える。

Ba群の器種は壺、甕、台付甕、高杯、有孔鉢が認められる。器種・出土量ともに豊富で、特に甕の量が多い。甕類は、胴中位に最大径を持ち、外面をハケ調整するものが主体となる。形態および調整方法から、A群と同様に外来的な様相が強くみられる。しかし、壺類をみると櫛描文の施文や外面の赤彩など、箱清水式土器と共通する技法が認められる。また、甕類の頸部に関しても、立上りを持ち箱清水式土器の様相を残すものと、外来的要素である「く」の字状に外反するものが存在している。他地域の文化が取り入れられ、その一部が当該地で定着しつつあると考えられる。

これらの土器様相から、周溝墓3004が造営された時期の桐原牧野遺跡は、他地域との交流を通して文化を受容し、生活に反映されつつある段階と推察される。また、A群の土器は、周溝墓3004の被葬者あるいは桐原牧野遺跡の古墳時代前期集落が持っていたネットワークの一端を示すものと考えられよう。

以上、周溝墓3004出土土器を概観し、当該時期の桐原牧野遺跡の様相に関して考察を試みた。桐原牧野遺跡を始めとする浅川扇状地遺跡群では、各所の発掘調査によって弥生時代末期から古墳時代前期の資料も多く蓄積されている。古墳とそれに伴う文化が地域へどのように波及し変化を与えたのか、また、地域がどのように受け入れていったのか、遺構・遺物の調査検討が今後の課題と考える。

（篠井ちひろ）



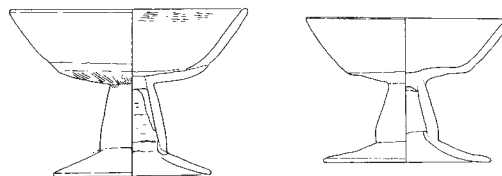
SM3004出土土器（A群）・県埋文2021年

2 古墳時代中期の桐原牧野遺跡

今回の桐原牧野遺跡の発掘調査では、3棟の古墳時代中期後半（5世紀）の竪穴建物跡を明らかにした。いずれも長野盆地カマド定着期の様相を示す。5世紀は倭の五王の時代であり、小・中学校の教科書的にはヤマト政権の大王が中国大陸や朝鮮半島地域との関係を深め、鉄資源や先進技術の移入を倭社会に求めた時代である。渡来人および倭人が倭国社会に窯業生産、絹織物、土木工事、仏教や漢字を伝えたと言われるが、長野盆地では、竪穴建物内へのカマドの採用、馬の渡来と馬具の古墳への副葬も先進技術や社会変化の要素として注目されてきた。

県埋文センターによる高田若槻線の調査では、古墳時代中期の竪穴建物跡が桐原牧野遺跡のみに6棟確認された。直線距離約120m間に重複することなくカマドを北東方向に向けて地形に沿って散在する。今回明らかにされた建物跡もその一角を占めている。この単位を桐原牧野古墳時代中期集落（以下、桐原牧野遺跡）としよう。浅川扇状地遺跡群の5世紀代古墳時代中期集落は、現段階では長野高校校舎改築に伴う調査で明らかとなった本村東沖遺跡が最大で、カマド導入直前から後期初頭までの56棟の集落様相から、その中核集落と考えられてきた。桐原牧野遺跡と本村東沖遺跡の共通点は、地形の傾斜に規則正しく住居の主軸を合わせて構築し、カマドを北東方向に構えることや、ムラのなかに区画施設（溝やピット列）が確認できないことである。建物構造も均質的に見える。相違点としては須恵器の出土率が本村東沖遺跡に多いこと、桐原牧野遺跡ではほとんど認められないことである。石製模造品の製作址としては、本村東沖遺跡SB36では剣形品を中心に勾玉、有孔円板の研磨作業が認められることに対し、桐原牧野遺跡SB3062では白玉の穿孔や研磨を中心に勾玉、有孔円板を製作していた。葬送儀礼や祭祀における集落間の様相差を垣間見ることができまいか。

今回の調査地点から地附山古墳群が所在した地附山が良く見えた（巻頭図版）。地附山古墳群は古墳時代中期後半から後期初頭の5基の古墳群で、その内部主体は5世紀の新たな埋葬を意識した横口構造を有すると考えられる合掌式石室や箱形石棺で、馬具をはじめ須恵器・土師器が葬送儀礼に伴う用具として副葬された。浅川扇状地の古墳時代中期の村々と地附山古墳群の埋葬者との関係を想起しつつ、地附山古墳群2号墳土器埋納抗の高杯と、今回のSB1カマド内支脚高杯を並べて提示し、結語とする。



桐原牧野遺跡SB 1 地附山古墳群 2号墳

（青木一男）

【引用・参考文献】

- 長野県埋蔵文化財センター 2021 『長野市 浅川扇状地遺跡群（都）高田若槻線 長野市 桐原～吉田（1）第一分冊・第二分冊』
長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書130
- 長野市教育委員会 1988 『地附山古墳群』長野市の埋蔵文化財第30集
- 長野市教育委員会 1993 『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』長野市の埋蔵文化財第50集
- 長野市教育委員会 2016 『浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡』長野市の埋蔵文化財第143集
- 長野市教育委員会 2016 『浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡（2）・桐原要害（高野氏館跡）』長野市の埋蔵文化財第145集
- 長野市教育委員会 2021 『浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡（3）』長野市の埋蔵文化財第159集

報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん きりはらまきのいせき（４）
書名	浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡（４）
副書名	（仮称）桐原二丁目マンション新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第174集
編集者名	青木一男 篠井ちひろ パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2024年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
あさかわせんじょうちいせきぐん 浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡	ながのけんながのし 長野県長野市 きりはらにちようめ 桐原二丁目 ほかに 883-1外	20201	A-501	36° 39′ 46″	138° 12′ 54″	20230302 ～ 20230329	299m ²	マンション 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
浅川扇状地遺跡群 桐原牧野遺跡	集落跡 墓域	古墳時代	周溝墓	2基	土師器	
		古墳時代	竪穴建物跡	3棟	土師器・砥石	
		古墳時代	掘立柱建物跡	1棟	土師器	
		古墳時代	土器集積 小穴	4基 9基	土師器	
		時期不明	小穴 河川跡	7基 1条		

要旨	<p>浅川扇状地・扇端部に位置し、古墳時代前期の墓域および古墳時代中期から後期の集落跡を検出した。古墳時代前期の周溝墓SM3004は、既存の調査で周溝底から東海系小型高杯・壺、外来系結合器台が出土している。今回の調査では、前方後方型周溝墓1基を想定する7基以上の墓域の一角で、周溝墓SM3004の未調査区を含め、古墳時代前期と想定される2基の周溝墓を調査した。3棟の竪穴建物跡は古墳時代中期後半で、カマド内およびカマド周辺から土師器の甕・杯・高杯等が出土したが、須恵器の出土はない。1間×5間の掘立柱建物跡については、古墳時代後期の建物跡と想定している。現状では、浅川扇状地遺跡群の中で数少ない古墳時代中期後半の集落跡の調査となった。</p>
----	---

長野市の埋蔵文化財第174集

浅川扇状地遺跡群
桐原牧野遺跡（4）

令和6年3月29日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 長野市埋蔵文化財センター
印刷 三和印刷株式会社